

東アジアの箸文化小考 —食事用二本箸の起源と展開—

三浦良幸*

はじめに

まず始めに、箸および箸文化に関する従来の研究を簡単に紹介しておきたい。わが国における、箸文化に関する学術的研究は、太田昌子氏の一連の研究が最も名高い¹⁾。氏は「中国古代における箸使用の定着について—古代文献より見た定着年代の考察—」²⁾において、中国の古代文献(絵画を含む)を詳細に検討することによって中国における箸使用の定着年代を推定した。また同論文を考古学的な資料で補完する形で「箸のルーツの謎を秘める古代中国の食習」³⁾を発表している。氏の行った研究は非常に実証的かつ堅実なものであり、本論文を作成するにあたって資料収集の上からも方法論の上からも大いに参考になった。文献学的かつ考古学的アプローチによる研究は長谷川千鶴・向井由紀子・橋本慶子三氏の「わが国における食事用の二本箸の起源と割り箸について」⁴⁾のなかでもおこなわれており、これも日本の古文献に見られる箸の記述、考古学的資料を集める上で大いに参考になった。そのほか一色八郎氏⁵⁾、本田聰一郎氏⁶⁾、鳥越憲三郎氏⁷⁾などが民俗学的な立場から箸の研究を行っている。中国においても、近年になって王仁湘氏⁸⁾、沈俦氏⁹⁾が考古資料を検討するという形で研究をおこなっており、注目に値するといえよう。

それ以外にも、古今東西にわたって箸文化について考察した記述は多い¹¹⁾。しかし、そのほとんどが実証的な研究によらない、推測、コメントに類するものであるため、ここでは触れないでおく。ただ、その中のいくつかは本論文の考察を進めていく上で大きなヒントとなった。

本稿は、これらの先行研究の成果を参考にしつつも、従来見落とされがちだった箸文化の全体像、つまり「東アジアの箸文化」という視点からの考察に重点を置く。箸文化の東アジアにおける歴史的展開を、現在過去未来にわたって考察していくこと。これが本論文の目的である。

構成としては、まず第一章で箸使用の現状、その地域的特性など箸文化の現状について概観する。次に第二章で古文献及び考古資料を基に各地域における箸使用の起源、普及時期について考察する。第三章では様々な観点から、箸文化が東アジアに広まった背景について考察し、最後にそれらを踏まえた上で、箸の起源地の推定を行うこととする。

なお、序を終えるにあたって、本稿で使用する用語について、いくつかの定義と説明を行っておく。

*筑波大学比較文化学類

- ①本稿における「箸」とは、「日常の食事の際に食物を口に運ぶために用いられる二本製の器具」を指すものとする。したがって、菜箸、真魚箸などの「給仕用の器具」や、火箸、折り箸などの「食事以外の目的で使われる箸」は、食事用の二本箸とは異なる特殊な器具として区別して扱うことにする。
- ②箸、匙、ナイフ、フォーク等の「食物を口に運ぶための器具」は「食具」として分類し、いわゆる「食器」とは区別する。
- ③本来「はし＝箸＝筷子＝Chopsticks」を示す表記は、各時代、各地域によって様々であるが、ここでは、日本において最も一般的な表記である「箸」を使用することにする。

〔注〕

- 1) ①太田昌子「中国古代における箸使用の定着について—古代文献より見た定着年代の考察—」(『風俗』第11巻第2号, 1973)
- ②太田昌子「中国古代における箸の定着に関する一考察—定着に至る諸条件について—」(『風俗』第13巻第4号, 1975)
- ③太田昌子「箸のルーツの謎を秘める古代中国の食習」(『生活文化史5 食と食空間』雄山閣, 1984)
- ④太田昌子「箸のつまみやすさに関する実験的研究」(『家政学研究』Vol. 22, No. 1, 1975)
- 2) 前掲論文 1) ①
- 3) 前掲論文 1) ③
- 4) 長谷川千鶴・向井由紀子・橋本慶子「わが国における食事用の二本箸の起源と割り箸について」(『調理科学』Vol. 10, No. 1, 1977)
- 5) 一色八郎『箸の文化史』(御茶の水書房, 1990)
一色八郎『日本人はなぜ箸を使うか』(大月書店, 1987)
- 6) 本田聰一郎『箸の本』(柴田書店, 1978)
本田聰一郎『箸の本』(日本実業出版社, 1985)
- 7) 鳥越憲三郎『箸と俎』(毎日新聞社, 1980)
- 8) 王仁湘「古代的筷子及其使用」(『中国烹飪』1985, 9)
王仁湘「中国古代進食具七箸又研究」(『考古学報』1990, 3)
- 9) 沈涛「箸探」(『中国烹飪』1987, 5)
- 10) 箸、箸文化について考察した文献として以下のものが挙げられる。
宗左近訳 ロラン＝バルト著『表徴の帝国』(新潮社, 1974) P 25～28
木村尚三郎監訳, K. スチュワート著『食と料理の世界史』(学生社) P 180～182
中山太郎『日本民俗学2 風俗篇』(大和書房, 1977) P 388～390

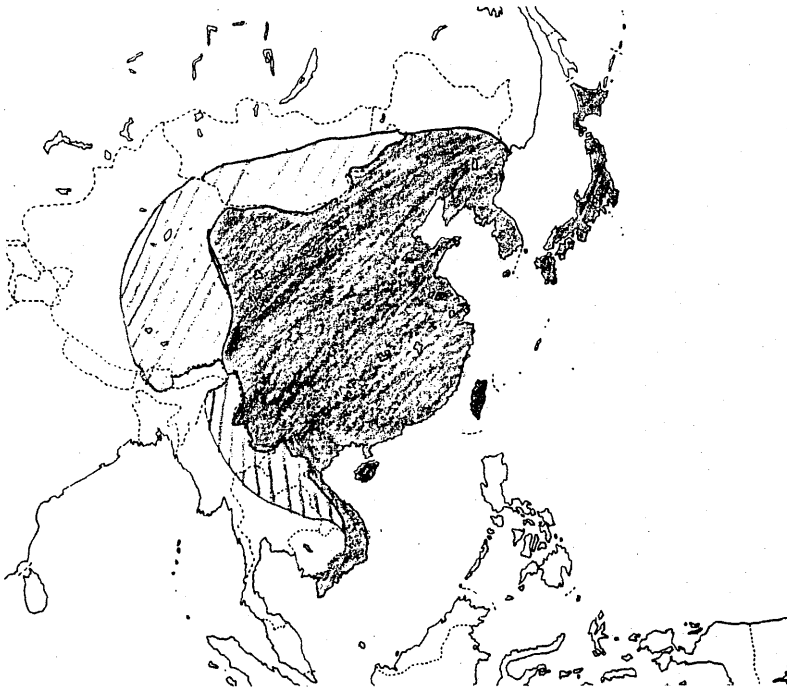
1. 東アジアにおける箸文化の現状

(1)東アジアにおける箸使用の現状

箸文化について考察していくに当たって、まず、食事の際に箸を用いるという風習が、現在どのような地域に見られるのかということを確認しておこうと思う。本来ならば、著者自らが現地へ赴き、調査、確認すべきものなのであるが、ここでは石毛直道氏、中尾佐助氏、辻静雄氏らを中心に編集された『週刊朝日百科 世界の食べもの（全140冊）¹⁾』、また『季刊 民族学²⁾』を主な資料とし、そのほか、いくつかの写真集、調査報告、旅行記等を参考に、概観していくことにする。

箸が、最も頻繁に使われているのは、中国の漢民族居住地域、朝鮮半島（朝鮮人）、日本（日本人、アイヌ人³⁾）、ベトナム（ベトナム人）、台湾（漢民族）である。箸が日常の食事のなかでほとんど欠かさず用いられているこれらの地域は、東アジアにおける箸使用の中心地であると言えることができる。

この他にも、毎日欠かさずとは言わないまでも、ある程度の頻度で食事に箸を用いるという地域が前述の中心地域の周辺部に見られる。例えばモンゴル（内蒙古自治区、モンゴル人民共和国を含む）では、蒙古刀の鞘と一緒に箸を納め、肉の小片をつまむときや、汁気の多いめん類を食



第1図 箸食文化圏

べるときにそれを用いることがある⁴⁾。また、中国西南部から東南アジア山岳地帯にかけて分布しているミャオ、ヤオ、アカ、トン、リス、チワン族等の少数民族の間でも箸の使用を確認することができる⁵⁾。チベットやブータンでは、上流階級の人達が宴会などで中国料理を食べる際に箸が用いられているようである⁶⁾。このほか、中国化の進んだ東南アジアや台湾の少数民族の間でも箸の使用を確認できる。さらに、めん類を食べる際には、中国の新疆ウイグル自治区や東南アジアのタイやマレーシアなどでも箸が用いられている⁷⁾。

以上、食事の際に箸を使用するという風習は、現在、中国、朝鮮半島、日本、ベトナム、台湾といった東アジアを中心に、アジアの広汎な地域にわたって確認することができるのである（第1図）。

もちろん世界各国の中国、朝鮮、日本、ベトナム料理レストランや、各地のアジア系移民（華僑、日系移民など）の家庭の中では箸が使われているわけだが、本稿では、それらは除いて考えていくことにする。

〔注〕

- 1) 『週間朝日百科 世界の食べもの 1～140号』（朝日新聞社、1981～1983）
- 2) 『季刊 民族学』（国立民族学博物館監修、1～54号、1977～1990）
- 3) 萱野茂『アイヌの民具』（すずさわ書店、1978）P228～230
- 4) 大塚和義「ゲルの一日」（『季刊 民族学』28号、1984）P102
梅棹忠夫、石毛直道、中尾佐助ほか『食事の文化』（朝日新聞社、1980）P78
- 5) 白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』（講談社、1978）P189～191
芳賀日出男「海南島紀行」（『季刊 民族学』18号、1981年）P94
- 6) 桑原武夫編『ブータン横断紀行』（講談社）P178
梅棹忠夫、石毛直道、中尾佐助ほか『食事の文化』（朝日新聞社、1980）P78
- 7) 『週刊朝日百科 世界の食べもの 78 東南アジア4 マレーシア、フィリピン』（朝日新聞社、1982）
8-203

(2)箸文化の諸相 —中国、朝鮮、日本を中心として—

同じ箸を使うとはいっても、その地域によって、箸そのものの材質、形態から箸の使い分けに至るまで、決して一様ではない。とりわけ中国、朝鮮、日本における相違は顕著である。ここではこの3つの地域を中心に、「箸」およびそれに連なる「箸文化」の諸相を概観していくことにする。

この「箸文化」に関しては、詳しい調査、研究が行われておらず、資料もきわめて乏しい。また各地域、各項目ごとの資料の数にばらつきが見られるため、あえて比較や分析を行うということとはしなかった。あくまでもわかっているものについて、事実を列挙していくに留める。

	日 本	朝 鮮	中国（漢民族）	その他の地域
表記 呼称	「箸＝はし」 *アイヌ語では「バスイ」	「저가락 = チョッカラク」 普通は箸と匙で「수저＝スジョ」	「筷子＝Kuai zi＝クァイツ」	
語源	「嘴」＝食物をつまむ様子が鳥が嘴でつ いばむ姿に似ている 「端」＝木の端部を使うところから 「間」＝二本の箸と箸の間、食物と人 間との間 「構」＝食物と人の構 「柱」＝柱状の形 (表注1)	「チョッカラク」は「尖ったもの」 の意	もともとは「箸」が用いられて いたが、「箸＝Zhu」の音が「住 ＝Zhu」「滯＝zhi」に通じること から南方の船頭達の間で避け られるようになり、対義の「快 ＝Kuai」が用いられるようにな った。その後「快＝速い」と区 別するため竹冠をかぶせるよう になり、複音化して現在の「筷 子」になる。(表注2)	不明
材質	木、竹の塗り箸が多い	銀製、真鍮製、ステンレス製	木、竹、象牙製など	木、竹がほとんど *モンゴルでは銀製、象牙製、骨製のものも
長さ	20-23cm前後	日本のものと同じかやや短め	25-27cm前後	中国のものに準ず（モンゴルは少し短めか）
器形	円柱形、方頭円先 両細のものもある 先が細く尖っている	偏平形 片細 先は多少細くなっている（日本ほど ではない）	円柱形、方頭円先、直方体 先は細くなく寸胴	中国のものに準ず
置き方	横に置く	両方の場合がある（表注3）	縦に置く	縦に置く場合が多い
祭礼との関わり	仏壇への供え物に箸が添えられる 神饌に特別製の箸が添えられることが 多い 箸を祭祀用の器具として非常に重視 様々な民俗行事に特別製の箸が用いら れる。	祭礼（先祖供養の儀式）に箸と匙が 重要な役割を果たす。	忌事（葬式など）には白い箸が 慶事には紅い箸が用いられる。 寺院（法門寺）などから箸が出 土している。	不明
神話、伝説、昔話	頻繁にかつ重要な役割を持って登場	不明	村王の象牙の箸の伝説	チワン族の昔話に登場
タブー	落とし箸 探り箸 箸渡し 握り箸 ねぶり箸 洗い箸 かき箸 受け箸 クロス箸 寄せ箸 もぎ箸 こじ箸 つかみ箸 そら箸 持ち箸 直箸 そろえ箸 刺し箸 渡し箸 横箸 指さし箸 叩き箸 速い箸 立箸 せせり箸 二人箸 かみ箸 などなど (表注4)	箸で御飯を食べてはいけない 箸と匙と一緒に持って食べてはいけ ない。 (表注5)	碗口箸＝渡し箸 死人箸＝立箸 長短箸＝長さの不揃い 雑色箸＝色の不揃い 葬箸＝白い箸 執箸＝二人箸 招箸＝涙箸 (表注6) *台湾では箸を茶碗の底にカチ ャカチャぶつけ、茶碗に口をつ けながら御飯をかきこむのが礼 儀とされる（表注7）	不明
分化	調理用の箸（菜箸、真魚箸） 取り箸 割り箸（江戸時代から） その他、多数の縁起もの（縁結び、長 寿、健康など）の箸	調理用には長めの箸を使う 取り箸はない 割り箸は「衛生箸（ワリバシと呼 ぶ）」として徐々に浸透	調理用には長めの箸を使う 取り箸はない 割り箸は「衛生筷子」として徐 々に浸透	不明
使い分け	「箸」型	「箸＋匙」型 *匙主箸従	「箸＋匙」型 *箸主匙従	「手＋箸」型（西南アジア、東南アジア山地の 少数民族） 「箸＋匙」型、「箸」型も見られる

第1表

- 表注1 本田聰一郎『箸の本』（日本実業出版社、1978）P 36
 表注2 明の陶宗儀 等編『菰園雜記（俗諺）』（『説郭三種（九）説郭四十六号より引用、上海古籍出版社）
 表注3 石毛直道、黄越性『韓国の食』（平凡社、1988）P 151
 表注4 本田聰一郎『箸の本』（日本実業出版社、1978）P 100～110
 表注5 石毛直道編著『東アジアの食の文化』（平凡社、1981）P 236
 表注6 宋経文『筷子的忌諱』（張頌松、謝基賢ほか編著『飲食習俗遼寧大学出版社、1988）P 218～221
 表注7 島尾伸三『香港市民生活見聞』（新潮文庫、1984）P 205

<箸の材質>

まず箸の材質に関して見る。現在、ほとんどの地域では木製あるいは竹製のものが使われている。唯一金属製（銀製、真鍮製、ステンレス製）のものが日常的に使われているのが朝鮮である。（写真18）。朝鮮では箸ばかりでなく、匙やその他の食器類も金属製のものが使われていること

から、食具や食器と金属との結びつきは相当に強いものと思われる。

朝鮮以外では、中国で象牙製、骨製、鹿角製の箸（写真19）が、モンゴルで銀製（あるいは頭部や箸先に銀装を施したもの）、象牙製、骨製の箸が使われる場合がある（写真20）。

<箸の長さ、器形>

次に、箸の長さについて見る。最も長い箸が使われているのが中国で、大体25～27cm前後のものが多く用いられている¹⁾。台湾や、ベトナム、東南アジアの少数民族の間で用いられているのもほぼこれと同じ長さのものと思われる²⁾。日本ではほぼ20～23cm前後のものが主に使われている³⁾。朝鮮では日本と同じか、やや短めのものが使われているようである⁴⁾（写真21）。

器形についてはどうか。ほとんどの地域では円柱形、方頭円先（頭部の断面が四角、箸先の断面が丸）のものが使われているが、朝鮮では独特の偏平形（平べったい）のものが使われている。また、ほとんどの地域では箸先のそれほど細くないものが使われているが日本では独自の箸先が細く尖ったものが使われている。

<神事用、祭祀用の器具としての箸>

中国や朝鮮では、神話、伝説に箸が登場することはきわめて稀であるが、日本では箸が神話や伝説に頻繁に、しかも重要な役割をもって登場する（第2表参照）。

古事記 スサノオミコト	出雲の流れ箸
仲哀天皇	箸浮かべ
日本書紀 倭迹迹百襲姫命	箸の御墓
奈良県桜井市箸中 奈良県五条市今井町	箸の墓 箸の墓
徳島県三好郡池田町	箸蔵寺
和歌山県日高郡日高町 和歌山県西牟婁郡近野村	箸折峠 箸折峠
福岡県甘木市～小石原村 埼玉県岩槻市 多賀大社	箸立峠 箸立杉 箸立杉
群馬県多野郡六郷村	俵箸

第2表 神話、伝説、昔話に登場する箸

日本の神話や伝説のなかで箸は「神の依り代＝神聖なる力が宿るもの」として、あるいは「神と人との掛け橋」として描かれていることが多く、これは日本人の「箸」観を知る上で重要なのである。

日本では、こうした「箸」観を背景として、箸は神事用あるいは祭祀用の器具としても用いられている。例えば伊勢神宮、出雲大社、春日大社、金刀比羅宮などでは神撰に欠かせない器具として「御箸（おんはし、みはし）」が必ず添えられるし⁵⁾、そのほかの多くの民俗行事（先祖供養や、農耕儀礼など）においても、日常生活で使うのとは違う特別製の箸が用いられる⁶⁾。

また、『古事類苑』において、箸が「食具」としてだけではなく「祭祀具」として、はっきりと分類されているということは興味深い⁷⁾。

朝鮮でも箸は先祖供養などの祭祀において必ず添えられ、重要な役割を持つ⁸⁾（図）。また、神話、伝説にこそ登場しないものの、15世紀に朝鮮の李圭景によって書かれた『五州衍文長箋散稿』には、

「朝鮮の巫女は神に祈る際に箸で柶を裂き、柶面の様子で曲の調子を定める。」

「我国ノ女巫神ニ祈ル箸ヲ以テ柶ヲ割ス、柶面其唱曲ヲ節ス⁹⁾、・・・」

と記されており、朝鮮においても、古くから箸は「祭祀用の器具」としての一面も持っていたということがうかがえる。また、この風習は女真族から伝わったものであるとも記されていることから¹⁰⁾、当時（15世紀）の女真族が箸を使用していたこと、また、その箸を「祭祀用の器具」の一つとして扱っていたことがわかる。

中国では慶事に紅い箸、忌事に白い箸が用いられることがある¹¹⁾が、それ以外の祭祀や民俗行事に際して、箸がどのように関わっているのか詳しい調査がなく、不明である。ただ、非常に装飾性の強い箸が陝西省の法門寺の伽藍から出土している¹²⁾ことから、ある程度の関わりはあったのではないかと思われる。

<作法、タブー>

それほど意識されていないものも多いが、箸作法について細かい規則やタブーが多数存在するのは日本の大きな特徴である¹³⁾。中国がそれに続いて多いが、日本ほどではない¹⁴⁾。朝鮮では箸と匙の使い分け（御飯、汁物は匙で、固形物は箸で食べる）に関する以外に厳格な規則、タブーは見られないようである¹⁵⁾。

<箸の分化>

調理用に少し長めの特別の箸を使うというのは中国、朝鮮、日本に共通して見られる習慣である。しかし、「取り箸」や「割り箸」を使うのは、日本独自の習慣である¹⁶⁾。中国や朝鮮では伝統的に取り箸がなく、中国ではむしろ主人が直箸で客に料理を取ってやるのが親しさを示す礼儀とされてきた。

割り箸は19世紀に日本の吉野で杉原宗庵という人物が杉の余材を利用して作らせたのが始まりであると言われている¹⁷⁾。最近では中国、朝鮮にも急速に普及しつつある。

<箸の「使い分け」>

箸だけですべての食物を食べるというやり方は日本だけでおこなわれているにすぎず、他の大部分の地域では、食物によって手、匙、箸を「使い分けて」用いるのが普通である。

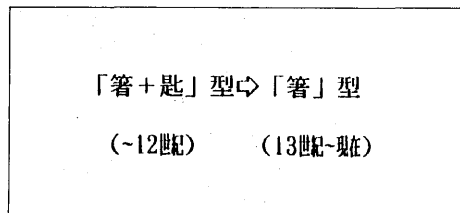
この「使い分け」には、大きく分けて①「箸」型、②「箸+匙」型、③「手+箸（+匙）」型の3つのタイプが見られる。①はほとんどすべての食物を箸で食べるという日本で行われているやり方を指す。②は中国と朝鮮で行われているもので、箸と匙を使って食物を採るというやり方である。これはさらに箸の使用頻度によって「匙主箸従」型と「箸主匙従」型にわけられる¹⁸⁾。前者は、御飯と汁物は匙で、固形のおかずだけを箸でという朝鮮で行われているやり方を、後者は、汁物だけは匙で、あとはすべて箸でという中国、台湾、ベトナムで行われているやり方を指す。③は西南中国、東南アジア山岳地帯の少数民族の間に見られるもので、手と箸を使って食物を採るという型である。この場合、御飯は手で、残りのおかずは箸であるいは匙で食べる。

手+箸	手主箸従	中国西南部、東南アジア山岳地帯の少数民族の一部
箸+匙	匙主箸従	朝鮮
箸+匙	箸主匙従	中国、台湾、ベトナム
箸	専箸	日本

第3表 箸の「使い分け」の型

朝鮮、ベトナム、台湾では、こうした「使い分け」の型に変化、変遷は見られなかったようだが、日本と中国では、現在の型に落ち着くまで、幾度かの変遷が見られる。

現在日本で行われている「箸」型は鎌倉時代以降始まったもので、それ以前は主に上流階級の間で「箸+匙」型の「使い分け」が行われていた¹⁹⁾。



第2図 日本における箸の「使い分け」の変遷

(遠藤元男, 谷口歌子『日本史小百科16 飲食』(近藤出版社, 1983) P 177, および, 関根真隆『奈良朝食生活の研究』(吉川弘文館1974 (2版)) P 346を図式化)

中国では現在の「箸主匙従」型に至るまで、箸の「使い分け」の型は以下のように変遷している²⁰⁾。

「手(+匙)」型⇨「手+箸」型⇨「匙主箸従」型⇨「箸主匙従」型
(~B. C. 6世紀) (B. C. 5-A. D. 1世紀) (A. D. 2~13世紀) (A. D. 14世紀~現在)

第3図 中国における箸の「使い分け」の変遷

(青木正児「用匙喫飯考」(『華国風味』岩波文庫, 1986(3版)) P101~113を図式化)

現在東アジアで見られる4つの「使い分け」の型のうち3つまでが、かつて中国で行われていたものであったということは注目すべきであろう。

以上、中国、朝鮮、日本を中心に、箸に関わるいくつかの項目について概観した。日本以外の地域の箸文化、特に<箸と祭祀との関わり>や<神話、伝説、昔話と箸>に関する資料が皆無とあってよい状態であるため、深い考察をすることもなく、ただ事実を列挙するにとどめた。しかし、少なくとも、東アジアの「箸文化」というものが決して一様ではないということは示すことができたのではあるまいか。

〔注〕

- 1) 一色八郎『日本人はなぜ箸を使うか』(大月書店, 1987) P86, P110
著者所有の中国製の箸(上海和平飯店で使用されているもの)は25cmを測る。
- 2) 箸を使用している際(手に持っている際)の写真から判断して、少なくとも日本のものよりは長いものを使用していると思われる。
- 3) 太田昌子「箸のつまみやすさに関する実験的研究」(『調理科学』Vol, 22, No1, 1975)
- 4) 箸を使用している(手に持っている)際の写真から判断して、日本のものと同じか、やや短いものを使用していると思われる。
- 5) 一色八郎『箸の文化史』(御茶の水書房, 1990) P81~93
- 6) 前掲書5) P19~20, P73~75
- 7) 『古事類苑』(吉川弘文館, 初版は明治29年)のなかの箸の記述は「器用部二」飲食具二(『古事類苑31器用部一』吉川弘文館, 1970)と「神祇部四十一」祭具(『古事類苑6 神祇部二』吉川弘文館, 1967)の両方の項に記載されている。
- 8) 若松実『韓国の冠婚葬祭』(高麗書林, 1982) P236
韓東亀『韓国の冠婚葬祭』(国書刊行会, 1973) P361

- 9) 今村軻編『李朝時代の各種文献 風俗関係資料撮要(下)』(民俗苑, 民俗学会2頒布書, 1944) P1064
- 10) 「我国ノ女巫神ニ祈ル箸ヲ以テ栲ヲ割ス, 栲面其唱曲ヲ節ス, 此レ女真ノ俗ニ出ズ」前掲書9) P1064
- 11) 宋経文「筷子的忌諱」(『飲食習俗』遼寧大学出版社, 1988) P219~220
- 12) 第二章第一節の表3を参照のこと
- 13) 本田聰一郎『箸の本』(日本実業出版社, 1985) P182~183
- 14) 前掲書11) P218~221
- 15) 石毛直道編著『東アジアの食の文化(食の文化シンポジウム'81)』(平凡社, 1981) P232~238
石毛直道, 黄慧性『韓国の食』(平凡社, 1988) P151~160
- 16) 本田聰一郎『箸の本』(日本実業出版社, 1985) P57
- 17) 長谷川千鶴・向井由紀子・橋本慶子「わが国における食事用の二本箸の起源と割り箸について」(『調理科学』1977, 4) P44
- 18) 「匙主箸従」型, 「箸主匙従」型の語は, 前掲書16) P62~63のなかで本田氏が使用したものである。
- 19) 遠藤元男, 谷口歌子『日本史小百科16 飲食』(近藤出版社, 1983) P177
関根真隆『奈良朝食生活の研究』(吉川弘文館1974(2版)) P346
- 20) 青木正児「用匙喫飯考」(『華国風味』岩波文庫, 1986(3版)) P101~113

2. 各地域における箸使用の起源と普及時期について

(1)中国

考察の前にまず, 考古資料及び古文獻の記述について整理を行うことにする。まず, 考古資料について触れる。

中国ではこれまで少なくとも45ヶ所から674本+1束(334対と6本+1束)の箸が出土している(次ページ第4表を参照のこと)。このなかで最も古いのは, 雲南省祥雲大波那から出土した銅箸で, 放射線測定によって「BC465±75年」のものであるということが判明している¹⁾。これは春秋時代の中晩期にあたる。その後の各時代からもそれぞれ出土が見られるが, 特に, 兩漢代, 唐代の出土例は豊富である。

出土した箸の材質は銀, 銅などの金属製がほとんどであるが, これは金属が木や竹に比べ腐食に強いということが原因であろうと思われる。

長さは一様ではなく, 最も短いもので9.2cm, 最も長いもので33.1cmであった。全出土例の平均は約23cm。時代別に見ると漢以前21.7cm, 漢代21.7cm, 魏晉南北朝16.4cm, 隋唐代29.2cm, 遼代(含西夏)20.5cm, 南宋24.5cm, 元代24.9cm, 明代24cmであった²⁾。時代につれ長くなった, あるいは短くなったというような特別な傾向は見られず, したがって長さによって時代を論ずることはできない。ただ, 唐代に30cmを越える極端に長いものが多く見られること(ただし, 20cm以下の極端に短いものも多い), それ以外の時代には概して短め(20~25cm)のものが多かったことなどは指摘できよう。

文献	時代	出土地点	数(本)	材質	長さ	直径	器形、裝飾など	備考(墓主など)
1	春秋中晚期	雲南省祥云大波那(M1)	3	銅	24-28	0.4	円柱形	昆明族の首長級の人物 B. C. 465 ±75年 (放射線測定による)
2	春秋晚期～戰国初期	安徽省黃池家徽冲	2	銅	20.3	0.7	残、断面長方形	
3	戰国末期～漢初	雲南省祥云大波那(M2)	3	銅	14.8	0.5	円柱形、中部に黒漆、両端に朱漆	同地点から出土したM32と合わせて40本出土
4	戰国末期～漢初	山東省臨沂市金雀山(M31)	40	竹	22		円柱形、中部に黒漆、両端に朱漆	
5	西漢早期	湖北省雲夢大墳頭	16	竹	24	0.2-0.3	円柱形、首粗足細	諸侯の身内の女性 明器(祭祀用器具)か 同地点から出土したM31と合わせて40本出土
6	前期	湖南省長沙市馬王堆1号墓	2	竹	17	0.5	扁平	
7	中期～晩期	山東省臨沂市金雀山(M32)	1	竹	22		円柱形、中部に黒漆、両端に朱漆	
8		湖北省江陵鳳凰山8号漢墓	1	竹	?			
9	(漢)	湖北省江陵鳳凰山167号漢墓	21	竹	?			
10	東漢初期	新疆维吾尔自治区鄯善	2	木	23-27		首粗足細	新疆少数民族の貴族か
11		広東省韶關市	2	銅	?		首粗足細	祭祀用か
12		四川省重慶市相国寺	2	銅	17		首粗足細	
13		雲南省大理県会同鎮	6	鉛	23		首粗足細	
14		雲南省大理県会同鎮	2	銅	20	0.3	方頭円先、徐々に細くなる	
15		広東省広州市東莞沙河	4	銅	25			
16	晩期	湖南省長沙東屯渡	2	銅	22			
17	漢末～魏晉南北朝	湖南省常德寺西郊	?	銅	?		方頭	漢の商人あるいはその家族
18	蜀漢後期	四川省忠県	2	銅	23.5	0.3	円柱形、両端細	魏晉南北朝期の權勢一族
19	北周	雲南回族自治区固原県	2	銀	9.2		円柱形、両端細	
20	隋代	陝西省長安李静訓墓	2	銀	29		円柱形、両端細	
21	唐代	湖南省長沙市赤嶺山	2	銅	18.6	0.4	首螺旋状、末端は蓮花状	上級官吏
22		河南省洛陽瀋邱河	2	銀	15		円柱形、中部粗略	
23		河南省偃師杏園村(2ヶ所)	4	銀	15.8	0.3-0.5	首粗足細	宦官の上級官吏
24		河南省偃師杏園村	3	銀	30		円柱形、首粗足細	祭祀用か
25		陝西省耀州青陰村	2	銀	33		円柱形、首粗足細、魚、花の紋様、鍍金	宦官か富商
26		陝西省扶風県法门寺	2	銀	18.7	0.5	円柱形、首粗足細、両端平齊、魚、花の紋様、鍍金	中級～下級官吏
27		陝西省扶風県法门寺	4	銀	20.5-23.3	0.6	円柱形、頭部に小円状の頂	
28		浙江省丹徒丁卯橋	36	銀	22.2-32		円柱形、鍍金、力士の字	
29		浙江省嘉興県	30	銀	33.1	0.5	円柱形、両端細	
30		山西省長治市西郊	2	銀	21	0.35	円柱形、両端細	
31	遼代初期	遼寧省建平孫家營	2	銀	20	0.3	円柱形、頭部に竹節様の加工	契丹人の上層階級
32	中期	内蒙古土默特旗解放營子	2	銅	23	0.15-0.4	円柱形、弦紋	契丹人の貴族階級
33		吉林省農安縣万金塔村	8	銅	16-16.4	0.35	円柱形、首粗足細	契丹人(?)の備侶
34	晩期	河北省涿鹿県	4	銅	18.3		首粗足細、頭部に螺旋状の加工	西夏人(チベット系タングート族)
35	西夏	甘肅省武蔵青咀	12	木	27		首粗足細、頭部に螺旋状の加工	
36	南宋	四川省成都市南郊	32	銅	20.6	0.4-0.6	円柱形、首粗足細	上流階級
37		四川省内中県	244	銅	25		首粗足細、弦紋	
38		江蘇省江浦黄崗鎮	2	銅	20.2	0.4	円柱形、首粗足細	
39	南宋or元初	江蘇省無錫市南郊	4	銀	24.4-25.2		両端細、文字あり、中空のものあり	
40	金～元代	江西省吉安県	46	銀	24	0.8	首六角形、足円形、弦紋、竹節、文字	
41	元代	安徽省合肥孔廟	110	銀	25.5		首八角形、足円形、弦紋	
42	末	江蘇省蘇州市南郊	2	銀	26.8		首粗足細	
43	明代	四川省渠縣范家	1	竹	28		方首円足、紅漆、草書漢文14字	土僚蕃あるいはコラオ族の墓所
44		河南省寧陵黄崗	1	木	31		首方足円	
45		江蘇省無錫縣甘露	4	銀	19-23.5		円柱形、弦紋	

第4表 中国出土箸一覽く本表は王仁湘氏の「中国古代進食具七箸又研究」(『考古学報』1990, 3) P 282 の表を参考に筆者が拡充, 作成したものである。>

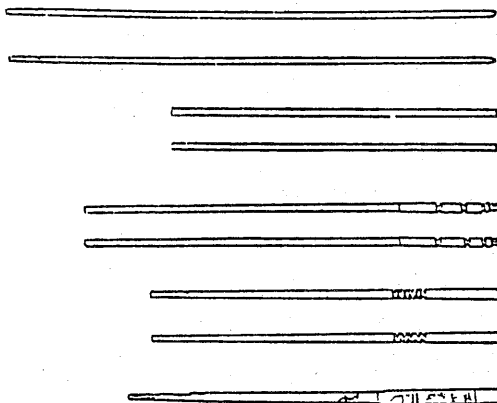
< 第 4 表の参考文献一覧 >

1. 雲南省文物工作隊「雲南省祥雲縣大波那木銅棺墓清理報告」(『考古』1964, 12)
李鴻啓編『雲南文物古跡』(雲南人民出版社, 1984)
中国科学院考古研究所實驗室「放射線炭素測定年代報告(四)」(『考古』1977, 3)
2. 安徽省博物館「安徽省貴池發現東周青銅器」(『文物』1980, 8)
3. 大理州文管所 祥雲縣文化館「雲南祥雲大波那木椁棺」(『文物』1986, 7)
4. 臨沂市博物館「山東臨沂金雀山九座漢代墓葬」(『文物』1989, 1)
5. 湖北省博物館「雲夢大墳頭1号漢墓」(『文物資料叢刊』4, 文物出版社)
6. 湖南博物館, 中国科学院考古研究所編『長沙馬王堆一号漢墓』上, 下集(文物出版社, 1973)
7. 臨沂市博物館「山東臨沂金雀山九座漢代墓葬」(『文物』1989, 1)
8. 金立「江陵鳳凰山八号漢墓竹簡試積」(『文物』1976, 6)
9. 鳳凰山167 漢墓發掘整理小組「江陵鳳凰山167 漢墓發掘簡報」(『文物』1976, 10)
10. 史樹青「新疆文物調查隨筆」(『文物』1960, 6)
11. 広東省博物館「広東韶関市郊古墓發掘報告」(『考古』1961, 8)
12. 甘肅省文物管理委員會「酒泉下河清第一号墓和第18号墓發掘簡報」(『文物』1959, 10)
13. 沈仲常「重慶江北相国寺的東漢磚墓」(『文物參考資料』1955, 3)
14. 雲南省文物工作隊「雲南大関, 昭通東河漢墓清理報告」(『考古』1965, 3)
15. 広州市文物管理委員會「広州市東郊沙河漢墓發掘簡報」(『文物』1961, 2)
16. 張中一「長沙東屯渡清理了一座東漢磚室墓」(『文物』1960, 5)
17. 湖南省文物管理委員會「湖南常德西郊古墓葬羣清理小結」(『文物參考資料』1955, 5)
18. 四川省文物管理委員會「四川忠県塗井蜀漢崖墓」(『文物』1985, 7)
19. 寧夏回族自治区博物館, 寧夏固原博物館「寧夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」(『文物』1985, 11)
20. 中国社会科学院考古研究所『唐長安城郊隋唐墓』(文物出版社, 1980)
21. 湖南省博物館「長沙赤峰山2号唐墓簡介」(『文物』1960, 3)
22. 河南省文化局文物工作隊第二隊「洛陽16工区76号唐墓清理簡報」(『文物參考資料』1956, 5)
23. 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「洛陽偃師杏園村的6座紀年唐墓」(『考古』1986, 5)
24. 樊維岳「陝西藍田發現一批唐代金銀器」(『考古与文物』1982, 1)
25. 陝西省博物館「陝西省耀県柳林背陰村出土一批唐代銀器」(『文物』1966, 1)
26. 陝西省法門寺考古隊「扶風法門寺塔唐代地宮發掘簡報」(『文物』1988, 10)
27. 臨潼縣博物館「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」(『文博』1985, 5)
28. 丹徒縣文教局, 鎮江博物館「江蘇省丹徒丁卯橋出土唐代銀器窖藏」(『文物』1982, 11)
29. 長興縣博物館 夏星南「浙江省長興縣發現一批唐代銀器」(『文物』1982, 11)
30. 長治市博物館「長治市西郊唐代李度, 宋嘉進墓」(『文物』1989, 6)
31. 馮永謙「遼寧省建平, 新民的三座遼墓」(『考古』1979, 2)
32. 翁牛特旗文化館, 昭烏達盟文物工作站「內蒙古解放營子遼墓發掘簡報」(『考古』1979, 4)

33. 劉振華「農安万金塔基出土文物」(『文物』1973, 8)
34. 張家口地区博物館「河北涿鹿県遼代壁画墓發掘簡報」(『考古』1987, 3)
35. 「文博簡訊」(武威出土一批西夏瓷)(『文物』1981, 9)
史金波, 白浜, 吳峰云編『西夏文物』(文物出版社, 1988)
36. 翁善良「成都南郊發現宋代窖藏銅器」(『考古与文物』1983, 6)
37. 間中県文化館 張啓明「四川間中県出土宋代窖藏」(『文物』1984, 7)
38. 南京市博物館「江浦黄悦嶺南宋張同之夫婦墓」(『文物』1973, 4)
39. 無錫市博物館「江蘇無錫市元墓中出土一批文物」(『文物』1964, 12)
40. 江西省歴史博物館 楊后礼「江西省東安県發現窖藏銀器」(『文物資料叢刊 8』1983, 12文物出版社)
41. 吳興漢「介紹安徽合肥發現的元代金銀器皿」(『文物參考資料』1957, 2)
42. 蘇州市文物保管委員會 蘇州博物館「蘇州吳張士誠母曹氏墓清理簡報」(『考古』1965, 8)
43. 四川省博物館 珙県文化館「四川」珙県洛表公社十具” 彝人” 懸棺清理簡報」(『文物』1980, 6)
44. 商丘地区文化局, 文管会「寧遼県華崗出土明代木船」(『中原文物』1983, 2)
45. 無錫市博物館 無錫県文物管理委員會「江蘇無錫県明華師伊夫婦墓」(『文物』1989, 7)

一方, 太さ(直径)はどうか。最も細いものが0.15cm, 最も太いものが0.8cmであった。なかでも0.3cm~0.4cmのものが多くみられ, 計測されたものを見るかぎり, 現在の中国のものに比べ細いものが多かったといえる。しかし太さ(直径)が計測されているものは全出土例の半分にも満たず, 一概に判断はできない。

器形については, 現在の中国で見られる円柱形のものや方頭円先(頭の部分の断面が四角で先のとつまむ部分の断面が円)のものばかりでなく, 断面が長方形のもの, 菱形のもの, 頭部の断面が八角形のものなども見られる。また, 弦紋が施されているものや文字が彫られているもの, 漆



雲南祥雲大波那 出土のもの

湖南長沙東屯渡 出土のもの

湖南長沙赤峰山 出土のもの

安徽合肥孔廟 出土のもの

四川珙県洛表 出土のもの

第4図 出土した箸(スケッチ) 王仁湘「中国古代進食具匕箸叉研究」(『考古学報』1990, 3) P 279より転載

塗りが施されているものも数例出土している。

出土の状況を時代別に見ると以下のようなになる（次ページの第5～13図を参照のこと）。まず春秋戦国期から前漢までは、主に長江流域のかたよった地域に集中的に出土している。次に、後漢に入って、新疆、甘肅、広東など、当時の領土のかなり辺境にあたる地域でも出土が確認されるようになる。唐、遼（含西夏）時代には陝西省などの北方の地域から集中的に出土している。南宋、元、明代には再び南方からの出土が多くなっている。全体的に見て、南方、特に長江流域の出土が多いことは注目すべきであろう。

次に中国古文献に現れる箸の記述を整理してみよう。古文献中の「はし」に当たる語としては、「箸」「桼」「櫡」「桼提」「筴」「筴」「快（子）」「筴（子）」が用いられている。これらのなかでは、「箸」が最も早く戦国時代に出現し、かつ後世に至るまで用いられている。「桼」も同じく戦国時代に出現しているが、「箸」よりやや遅れるようであり、「櫡」は前漢頃より、「桼提」は後漢頃より、「筴」および「筴」は唐代頃より、「快、快子」「筴、筴子」等は明代頃より出現しているという³⁾。

箸に関する記述が最初に現れるのは戦国時代の『荀子』『韓非子』『管子』においてである。その後、漢代になると『礼記』『史記』『急就篇』『淮南子』『方言』『説文解字』など、かなり多くの文献の中に散見されるようになる⁴⁾。また、漢代以降になると画像石などの絵画資料もいくつか見られるようになる（第5表、第14図参照）。

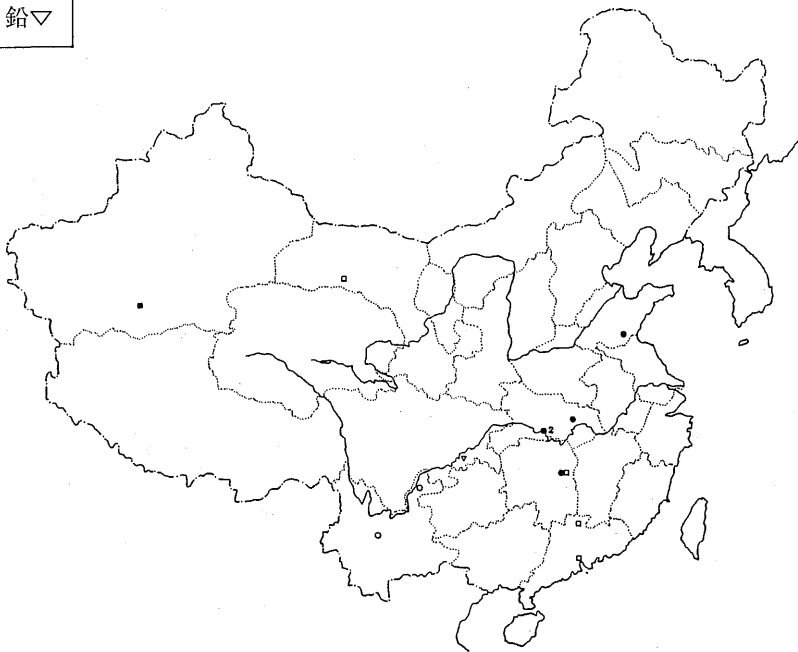


- * 地図上の数字は出土回数を示す。
- * 本地図は1973年度のものを使用したため、現在（1990年）の境界線とは多少異なる点がある。

第5図 中国における箸の出土地点
(全時代)



第6図 春秋～戦国期



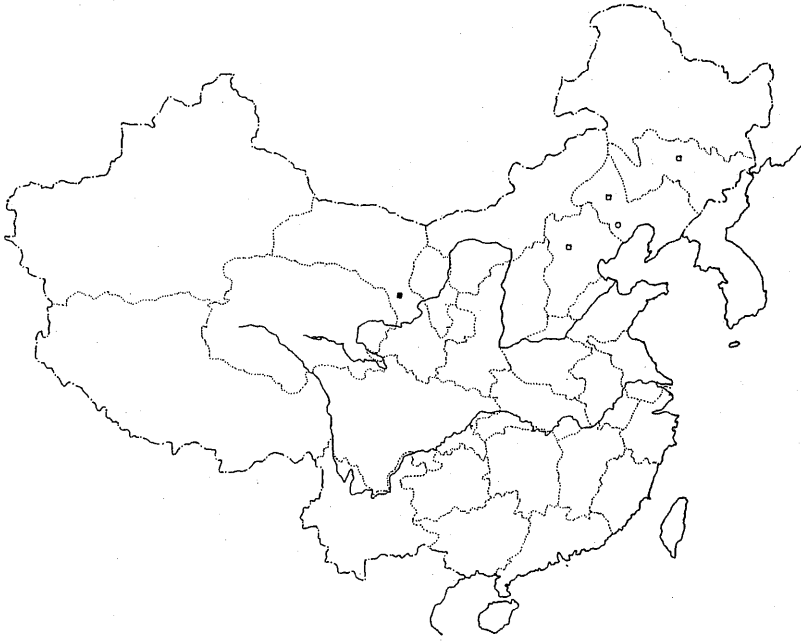
第7図 漢代



第8图 三国~魏晋南北朝



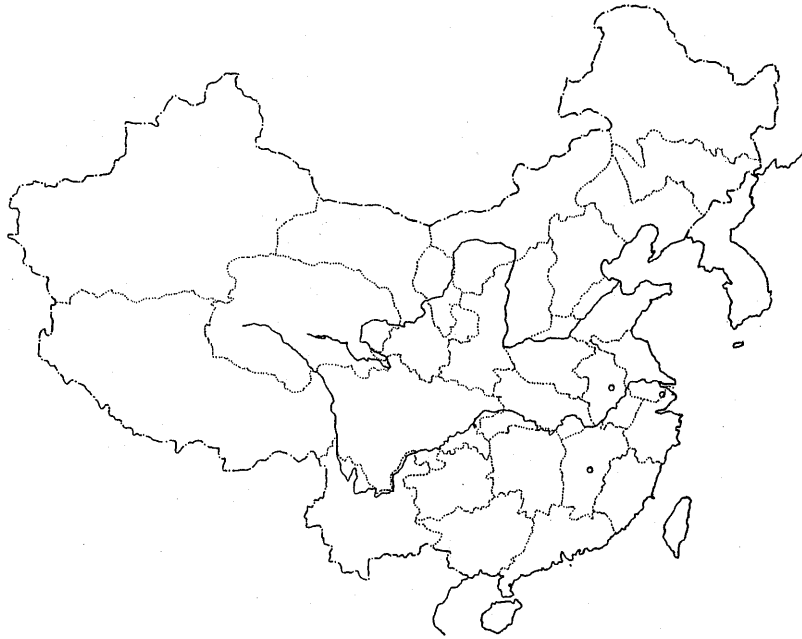
第9图 隋唐代



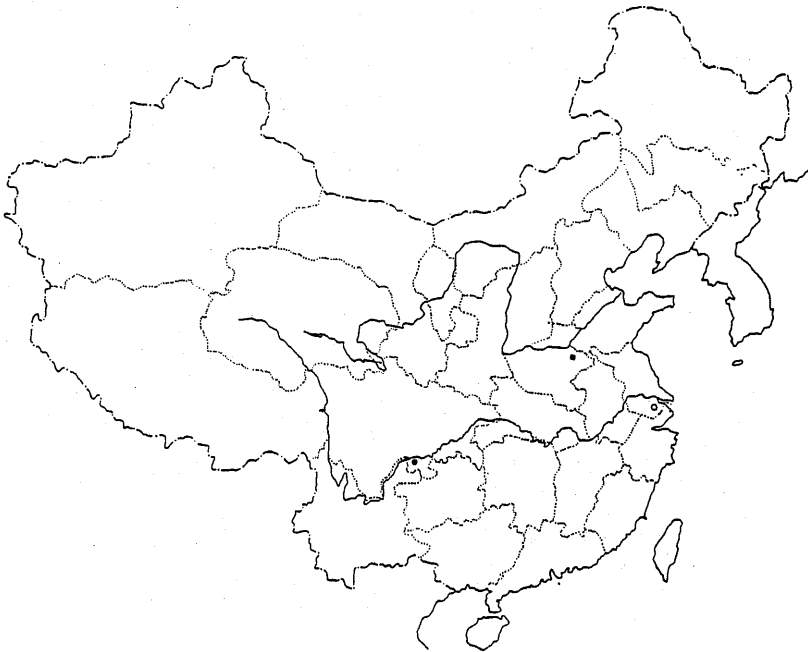
第10图 辽, 西夏



第11图 南宋



第12図 金, 元代



第13図 明代

時代	場 所	出 典
漢代 漢代 後漢	四川省（細部不明） 四川省（細部不明） 山東省嘉祥縣武氏祠 画像石	呂林編『四川省漢代画像芸術選』（四川省美術出版社，1988）P 25 高文編『四川漢代画像磚』（上海美術出版社，1987）図38 長広敏雄『漢代画像の研究』（中央公論美術出版，1960）P 79
三国～ 魏晋南北 西晋	遼寧省遼陽市 甘肅省嘉峪関市	李文信「遼陽発言的三座壁画古墳」（『文物参考資料』1955，5） P 18 甘肅省文物隊，甘肅省博物館，嘉峪関文物管理所編『嘉峪関壁画墓 発掘報告』（文物出版社，1985）図版58，60，61
唐代 唐代	陝西省長安県 新疆回族自治区 トルファン県	『文博』1989，4 『週刊朝日百科 世界の食べもの73 食事文化史（中国13）』（朝 日新聞社，1982）8-70

第5表 中国における主な絵画資料（壁画，画像石）



第14図 漢代の宴飲図 高文編『四川漢代画像磚』上海出版社，1987，図38より

では、以上挙げた、考古資料及び古文献の記述をもとに、中国における箸使用の起源と普及の時期について考察していくことにする。まず取り上げなければならないのは、『韓非子』説林上篇の記述である。

『殷の紂王が初めて贅沢な象牙の箸を作ったので、賢人の箕子は恐れた。こう考えたのである。

「象牙の箸となると、かわらけなどに盛るわけにいかず、きつと犀の角か玉で作った杯とということになるであろう。玉の杯で象牙の箸となると、豆と豆の葉などを盛るわけにはいかず、きつと旄牛や象の肉や豹の胎児をとということになるであろう。旄牛や象の肉や豹の胎児となると、身分の低いものの着る粗末な着物を着て、茅葺き屋根の下に住むわけにはいかず、きつと錦の衣を幾重にも重ねたもの、高い台、広い宮殿ということになるであろう。このようなものにふさわしいものを求めていくとなると、天下中のものを当てても足りなくなるだろう。」

聖人は物の微かな動きを見てその兆しを察し、物の糸口を見てその行く末を察する。それゆえ、象牙の箸を見て恐れたのは、天下中のものを当てても足りなくなると察したからである。

(傍線は筆者による)』

「紂為象箸，而箕子怖。

以為，象箸必不盛羹於土銅，則必犀玉之杯。

玉杯象箸，必不盛菽藿，則必旄象豹胎。

旄象豹胎，必不衣短褐，而舍茅茨之下，則必錦衣九重，高台廣室也。

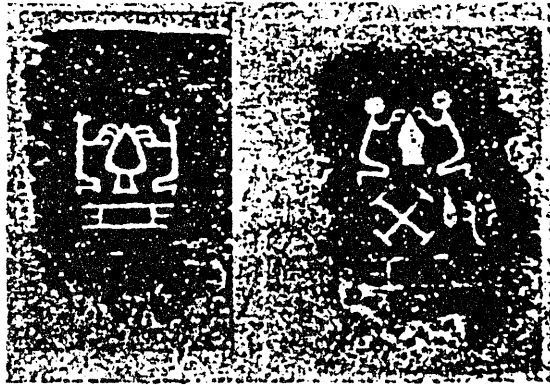
稱此以求，則天下不足矣。

聖人見微以知萌，見端以知末。

故見象箸而怖，知天下不足也。⁵⁾ (傍線は筆者による)』

この説林上篇の記述と、ほぼ同じ内容の喻老篇の記述⁶⁾を基に、箸の起源を殷代まで溯って考えようとする研究者がいる⁷⁾。しかし、紂王暴虐の伝説は後世の儒家の脚色であるといわれ⁸⁾、この記述の内容も殷代の様子を伝えるものであるとは信じがたい。また、殷代に箸が存在したということを裏づける当時の考古資料、文献資料も何一つ発見されておらず、箸使用の起源を殷代まで溯らせることは不可能であろう。むしろ、この時代には「簋に盛った稻粱を二人の人物が左右から食べている姿⁹⁾」をかたどった「郷=饗」を示す青銅器の銘文(第15図)に見られるように、食事は手を用いておこなっていたと考えられる。

ここで提示した考古資料、古文献の記述を通して確実にいえるのは、箸に関する最古の資料が、雲南省祥雲大波那から出現した銅箸であること。つまり箸使用の起源が春秋中晩期までは確実に溯ることができるということである。ただし、身近な竹や木ではなく、手の込んだ銅製のものも用いられるようになったこの時代は、ある程度箸が定着し始めた頃と考えてもよいだろう。つまり、資料こそないものの、箸の実質的な起源は春秋中晩期よりもう少し溯った時代であると推定



第15図 殷代の会食の様子

太田昌子「中国古代における箸使用の定着について—古代文献より見た定着年代の考察—」（『風俗』11巻2号，1973）より転載

することができるのである。

では、春秋中晩期以降使用されるようになった箸が、幅広い階層のなかで普及、定着するに至ったのはいつなのか。古文献の記述を通して考察していくことにする。

戦国時代の著作である『荀子』解蔽篇の中にこのような記述が見られる。

「山の下から山頂の木を仰ぎみると十儲の長さの木も箸のように短く見えるが、箸を求めているものは誰も山を上って行って折り取ろうとはしない。それは山の高いことがその長さをくらましているからである。（傍線は筆者による）」

「従山望木物十仞之木若箸 而求箸不上折 高蔽其長也¹⁰⁾（傍線は筆者による）」

これは、荀子が「不確かな感覚を基に物事を判断してはいけない」ということを教えるために用いた例え話である。荀子はこの後、箸だけでなく牛や羊といったものも例えに用いており¹¹⁾、このくだりは貴族や士大夫階級だけでなく、一般庶民をも意識したものであったことがわかる。つまり、箸はそのような平易な例え話に用いられるほど、この時代には一般的なものだったのである。

戦国時代の著作『管子』弟子職篇は、大規模な儒家学団のなかにおける礼や作法の規範を記したものとされるが¹²⁾、ここでも次のような記述が見られる。

「左手には瓶か盛り皿を持ち	「左執虚豆
右手には箸か匙を持ち	右執挾匕
食卓を廻りながら（料理を）盛り代えていく」	周還而式 ¹³⁾ 」

（傍線は筆者による）

ここでは箸が給仕用として何の疑問もなく食事の席に用いられていることがうかがえる。注目す

べきなのは、こうした箸の使用が、儀礼に関してかなり保守的な儒家学団のなかでおこなわれているということである。儒学者達にしてこれなのだから、古礼に縛られることのない一般庶民の間では、箸は「便利な道具」としてもっと積極的に使用されていたと考えられよう。

漢代に編纂された『礼記』は春秋から戦国時代にかけての礼の遺制を多く含んでいると言われ¹⁴⁾、特に、曲礼上篇に見られる一連の「進食の礼（食事の作法）」も『孟子』との記事の類似性から、戦国時代には既にその内容は成立していたと考えられている¹⁵⁾。ここにも箸に関する記述が現れている。

①「黍飯を食べるのに箸を使ってはならない。」

「飯黍無以箸。¹⁶⁾」

②「汁物に野菜が入っている場合は箸を用いる。野菜が入っていない場合は箸を用いない。」

「羹之有菜物用挾，其無菜物不用挾。¹⁷⁾」

①②の記述を裏返して考えれば、あえて禁止しなければならないほど、多くの人達が、箸を無分別（食物によって匙や手と使い分けたりしないで）に使っていたということを推測することができるであろう。また、①も②も、箸を無分別に用いることを禁止しているのであって箸の存在そのものを否定しているわけではないということは注目すべきことである。

先に挙げた『韓非子』説林上篇および喻老篇の記述は箸の殷代起源を証明するものにはならないが、記述のなされた当時すなわち戦国時代末期の箸の定着を知る上で重要である。というのも、この説話では、紂王が「贅沢な象牙で」箸を作ったということが問題になっているのであって、「王が箸を使う」ということが問題になっているわけではない。つまり、戦国時代末期には、王が箸を使っても決して不自然ではなかったということになるのである。これにより、戦国時代末期には王を含めた上流階級の間にもある程度箸の使用が普及、定着していたということがうかがわれるのである。

以上、戦国時代の4つの文献『荀子』解蔽篇、『管子』弟子職篇、『礼記』曲礼篇、『韓非子』説林上篇の中に見られる箸の使用に関する記述を取り上げ、若干の考察を試みた。これにより、箸を使用するという風習は、戦国時代までには庶民から保守的な儒家学団、王を含めた上流階級に至るまで、かなり広い階層にわたって普及、定着していたことができるであろう。

〔注〕

1) 中国科学院考古研究所実験室「放射線炭素測定年代報告（四）」（『考古』1977，3）

2) 長さの平均は、出土地点ごとに1本として計算した。ただし、同地点から長さの違うものが出土している場合にはそれぞれを1本として計算した。

3) 太田昌子「中国古代における箸使用の定着について—古代文献より見た定着年代の考察—」（『風俗』11

卷2号, 1973) P 38

- 4) 『太平御覽四』(中文出版社, 1980(再版)) P 3373~3374
5) 小野沢精一『全釈漢文体系20 韓非子(上)』(集英社, 1982(3版)) P 596~597

6) 喻老篇の記述

「昔者紂為象箸而箕子怖。

以為, 象箸必不加於土鑑, 必將犀玉之杯。

象箸玉杯, 必不羹菽菹, 必旄象豹胎。

旄象豹胎, 必不衣短褐, 而食於茅屋之下, 則錦衣九重, 廣室高台。

我畏其卒, 故怖其始。

居五年, 紂為肉圃, 設炮烙, 登糟丘, 臨酒池, 紂逐以亡。

故箕子見象箸, 以知天下之禍

故曰, 見子曰明。

(傍線は筆者による)」

小野沢精一『全釈漢文体系20 韓非子(上)』(集英社, 1982(3版)) P 544~545より

- 7) 王仁湘「中国古代進食具七箸又研究(『考古學報』1990, 3) P 283
王仁湘「古代筷子及其使用」(『中国飪烹』第九期 1985) P 21
- 8) 田村和親「殷の紂王の酒池肉林説話の生成」(『二松学舎大学論集』55, 1982)
- 9) 藤田国雄『殷帝国—中国古代の美術—』(現代教養文庫, 1962) P 212
- 10) 金谷治, 佐川修, 町田三郎『全釈漢文体系8 荀子(下)』(集英社, 1974) P 186~187
- 11) 牛と羊についての記述
「從山上望牛者若羊, 而求羊者不牽也。」
金谷治, 佐川修, 町田三郎『全釈漢文体系8 荀子(下)』(集英社, 1974) P 186~187
- 12) 宇都宮清吉「管子弟子職篇によせて—古代専制体制と社会諸集団との関係についての考察—」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』10, 1963) P 2, P 8, P 12
- 13) 前掲論文 12) P 5
- 14) 下見隆雄氏『礼記』(明德出版社, 1973) P 22に
「この篇(曲礼篇)の内容については, 古の曲礼を雜録したもので, 『礼記』中では古い礼を多数含むと考えられる」とある。
- 15) 前掲論文 3) P 42
- 16) 市原亨吉『全釈漢文体系12 礼記(上)』(集英社, 1982(第3版)) P 59~60
- 17) 前掲書 16) P 65

(2) 朝鮮

朝鮮半島における箸の出土はあまり多くない。著者が確認した限りではわずか数例に過ぎない。そうしたなかで, もっとも古いものは百済の武寧王(在位501~523年)陵から出土した銅箸である。古文献の中にもこれ以上古い資料が存在しないことから, 朝鮮における箸使用の起源は, と

りあえず6世紀まで溯らせることができる。

一方、箸使用の普及時期については、考古資料、古文獻の記述共に極めて少ないため明確な時代を推定することは困難である。

中国、日本、朝鮮の各種文獻から朝鮮の風俗に関する記事をすべて抜粋し、編集した労作『風俗関係資料撮要（全4冊）¹⁾』を見るかぎり、高麗以前の各種文獻には箸に関する直接的な記述（箸という文字）は発見できなかった。

『風俗関係資料撮要（全4冊）』に抜粋された文獻のなかで、箸の記述が初めて現れるのは、15世紀の李圭景の『五州衍文長箋散稿』においてである。これには以下のような記述が見られる。

「わが国の巫女は神に祈る際に箸で栲を裂き、栲面の様子で曲の調子をさだめる」

「我国ノ女巫神ニ祈ル箸ヲ以テ栲ヲ割ス、栲面其曲ヲ節ス²⁾」

ここでは、巫女が神に祈る際に箸を用いるということが話題なのであり、箸そのものについての言及ではない。つまり、この時代には既に箸そのものは決して特別のものではなかったということがうかがえるのである。したがってこの記述がなされた15世紀には箸は既に一般的なものであり、かなり普及していたということができよう。

しかし、庶民への普及時期が、この記述のなされた15世紀であるとする、上流階級に箸が使用されはじめてから庶民の間に普及、定着するまで900年もかかったということになり、非常に不自然である。朝鮮の「使い分け」の型（御飯は匙で、固形の副食物は箸で）が、もともとは中国の明代以前に行われていたものであること³⁾、また、既に高麗時代の箸には扁平形のものが見られ、箸に既に朝鮮の独自性が見られることなどから、実際には文獻で確認できる15世紀よりは前に普及時期を推定することができるであろう。

〔注〕

1) ①高麗総督府中枢院編『高麗以前の各種文獻 風俗関係資料撮要』（民俗苑、民俗学会頒布所、1940）

②今村鞆編『李朝実録 風俗関係資料撮要』（民俗苑、民俗学会頒布所、1939）

③今村鞆編『李朝各種文獻（上）風俗関係資料撮要』（民俗苑、民俗学会頒布所、1944）

④今村鞆編『李朝各種文獻（下）風俗関係資料撮要』（民俗苑、民俗学会頒布所、1944）

2) 前掲書1) ④P1064

3) 第一章第二節参照

(3) 日本

日本での箸の出土はおそらく相当の数のほぼであると考えられる。だが、ここでは著者が確認できた約30ヶ所から出土した箸をもとにして考察を進めて行くことにする（次ページの表6参照）。

最も古いものは、飛鳥板蓋宮から出土した木箸で、7世紀後半のものだろうと推定されている。そのほか奈良、平安時代のものとしては藤原宮跡、平城宮跡、平安京跡から、中世のものとして

時代	出土地点	本数	長さ	太さ	器形	文献
7世紀	奈良県 板蓋宮跡	2本以上	約30~33cm	0.5~1.0cm	両細, 片細	1
7~8世紀	奈良県 藤原宮跡	8本以上	15~22cm	0.4~0.7cm		2
753年前後	奈良県 平城宮跡	1本以上	19.0cm	0.5cm		3
奈良時代	奈良県 平城宮内東北外郭跡	302本以上	14~24cm (20~21cmが最も多い)	0.5cm内外		4
奈良時代	奈良県 平城宮左京一条三坊跡	70本以上	17~26.5cm	0.5cm前後		5
奈良時代	奈良県 正倉院	2本	25.8cm	0.65cm	両細	6
奈良~平安	静岡県 伊場遺跡	4本以上	26.1cm		片細, 両細, 断面精円	7
8~9世紀	秋田県 秋田城跡	9片	小片~25.3cm	0.4cm		8
9世紀前半	兵庫県 八反長遺跡	1本以上	21.1cm	0.3~0.4cm		9
9世紀半ば	山口県 周坊鑄錢司跡	9片		0.6cmと0.5cm	断面円形, 方形	10
9世紀後半	京都府 平安京西市跡	2本	21.3cm, 21.5cm			11
古代 (平安以降)	新潟県 曾根遺跡	16片				12
12世紀後半	和歌山県 根来寺坊院跡	16本				13
12~13世紀	熊本県 高橋南貝塚	18片	小片~23.5cm	1cm	両細	14
12~13世紀	京都府 古殿遺跡	1本	25cm	0.7cm	断面四, 五, 六角形	15
13世紀後半	静岡県 山の神遺跡	1本			両細	16
13~15世紀	神奈川県 諏訪東遺跡	22本	15~25cm (20~22cmが最も多い)		両細	17
鎌倉~室町	広島県 草戸千軒町遺跡	数万本				18
中世	静岡県 御殿跡遺跡	1本				19
中世	富山県 中小泉遺跡	25本				20
中世	富山県 江上B遺跡	7000本以上	16.2cm~27.9cm	0.3~0.8cm	断面六角形状, 方形	21
中世	東京都 青戸葛西城跡	3本以上			断面長方形, 略正方形, 三角形 (極少)	22
中世	鳥取県 布施遺跡	2本	小片~21.9cm	0.7~0.8cm		23
中世	神奈川県 蔵屋敷遺跡	多数	13.5~19.7cm	0.4~0.8cm		24
中世	静岡県 笠川南条坊遺跡	300本以上	20~24.2cm		両細, 断面精円, 隅丸長方形, 多角形	25
15~16世紀	富山県 弓庄城跡	4本以上			両細	26
16~17世紀	京都府 平安京左京内膳町	43本以上	21.4~27cm	0.5~1cm	寸胴, 片細, 両細	27
17~18世紀	宮城県 仙台城三ノ丸跡	13本以上	21~33cm			28
近世初頭	大阪府 難波宮跡	1片			朱漆	29
江戸時代	大阪府 西岩田遺跡	1本以上				30
江戸時代	奈良県 東大寺西門大垣跡	4本				31

第6表 日本出土箸一覽

<第6表の参考文献一覧>

1. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所学報第10冊』
2. 奈良県教育委員会『藤原宮跡昭和42年度調査概要』1967
3. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所資料第27冊 木器集成図録 近畿古代編』1984
4. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所学報第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976
5. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所学報第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ』1975
6. 皇室博物館『正倉院御物図録15』1944, 第36図
7. 浜松市教育委員会『伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 伊場遺跡遺物編Ⅰ』1978
8. 秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査事務所『昭和53年度秋田城発掘調査概報 秋田城跡』1979
9. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所資料第27冊 木器集成図録 近畿古代編』1984
10. 山口市教育委員会『周坊鑄銭司跡』1978
11. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所資料第27冊 木器集成図録 近畿古代編』1984
12. 豊浦町教育委員会『曾根遺跡Ⅰ』1981
13. 和歌山県教育委員会『根来寺坊院跡』1985
14. 熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告第28集 高橋南貝塚』1978
15. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所資料第27冊 木器集成図録 近畿古代編』1984
16. 浜松市, 浜松市教育委員会, 浜松文化協会『浜松市山の神遺跡発掘調査報告書 山の神遺跡』1989
17. 諏訪東遺跡調査会『鎌倉市 諏訪東遺跡』1985
18. 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡第11～14次発掘調査概報』1976
村上生名『まぼろしの中世遺跡 草戸千軒町』国書刊行会, 1980
19. 静岡県浜名郡新居町教育委員会『調査概報 遠江新居宿「御殿跡」遺跡』1984
20. 上市町教育委員会『北陸自動車道遺跡報告 上市町木製品総括編』1984
21. 上市町教育委員会『北陸自動車道遺跡報告 上市町木製品総括編』1984
22. 葛西城趾調査会『青戸葛西城趾調査報告Ⅱ』1974
葛西城趾調査会『青戸葛西城趾調査報告Ⅲ』1975
23. 鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書7 布施遺跡発掘調査報告書』1981
24. 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会『蔵屋敷遺跡』1984
25. 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 筑紫郡太宰府町所在笠川南条坊遺跡(1)』1975
26. 上市町教育委員会『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』1985
27. 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1980 第3分冊』1980
28. 仙台市教育委員会『仙台市文化財調査報告書第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』1985
29. 大阪市文化財協会『難波宮趾の研究 第7 報告編』1981
30. 大阪府教育委員会大阪文化財センター『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書本文編「西岩田」』1983

は広島草戸千軒町遺跡、富山江上B遺跡から、近世のものとしては宮城県仙台城三ノ丸跡、大阪難波宮跡などからそれぞれ出土している。特に中世の江上B遺跡からは一度に7000点を越す木箸が、草戸千軒町遺跡からは数万点にのぼる木箸が出土している。

出土した箸はほとんど全て木製のものであった、金属製のは正倉院の御物に見られる銀箸を除いて、一つも確認できなかった。これは、中国、朝鮮の考古資料との著しい違いである。

長さは20～25cmのものをもっとも一般的であり、現在の日本のものとほとんど変わらないと言える。また、太さも0.5cm前後のものも多く、これも現在のものとほとんど変わらない。

器形に関しては、現在のものと同じ断面が方形のものや円形のものだけでなく、断面が三角形のもの、五角形状のもの、六角形状のものも見られる。

次に古文献資料についてみる。日本で箸が文献上に最初に現れるのは8世紀に成立した『古事記(712年)¹⁾』においてである。そのほか、古いものでは『日本書紀(720年)²⁾』、『万葉集(770年)³⁾』、『延喜式(927年)⁴⁾』、『倭名類聚抄(930年代)⁵⁾』、『宇都保物語(983年)⁶⁾』、『拾遺和歌集(996年)⁷⁾』、『枕草子(11世紀)⁸⁾』、『今昔物語集(平安末期)⁹⁾』などに箸の記述が見られる。

では、以上挙げた考古資料及び古文献の記述を基に、日本における箸使用の起源と普及の時期について考察していくことにする。まず、日本の箸に関する最古の資料は、7世紀後半の飛鳥板蓋宮から出土した木製の箸である。したがって、日本における箸使用の起源は、少なくとも7世紀までは確実に溯ることができる。

8世紀になると『古事記』の神代の項に

「出雲の国の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りましき

此の時、箸其の河より流れ下りき

是に須佐之男命、人その河上に有りて以為ほして、尋ね覓ぎ上り往きたまへば、
老夫と老女と二人在りて、童女を中に置いて泣けり。・・・」

(訳 萩原浅男)¹⁰⁾

「降出雲国之肥上河上、名鳥髪地。

此時箸従其河流下。

於此須佐之男命以為人有其河上而、尋覓上往者、
老夫与老女二人在而、童女置中而泣。」

(傍線は筆者による)

という記述が現れる。

また、仲哀天皇の項には、

「・・・亦箸及ひらでを多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて度りますべし」

(訳 萩原浅男)¹¹⁾

「・・・亦箸及比羅伝多作、皆皆散浮大海以可度。」

という記述が見られる。

また、『日本書紀』には

「倭迹迹百襲姫命は御諸山を仰ぎ見て後悔しながら急居（急に座った）した。

そのとき箸が陰部に撞きささってなくなられた。」

「倭迹迹百襲姫命仰見，而悔之急居。則箸撞陰而蕘¹²⁾。」（傍線は筆者による）

の記述が見られる。

さらに『万葉集』には

「父母が生んで下さったおかげで、箸のように仲好く向き合っていた弟は消えやすい朝露のようにはかない寿命を、神の思し召しに背くこともできぬまま、この葦原の瑞穂の国に家がな
いとでも思うのか、二度と帰ってこない。」

「父母が 成しのままにまに 箸向かふ 弟の命は 朝露の 消易き命
神の共 争いかねて 葦原の 瑞穂の国に 家無みや また還り来ぬ¹³⁾」

（傍線は筆者による）

という歌が見られる。箸が、このように神話や伝説、歌集のなかに重要な役割をもって登場していることから、箸はこの時代には既にかなり定着していたと考えられる。

9世紀になると京都、奈良、秋田、兵庫、山口などの各地の遺跡から箸が出土しており、この時代までには箸がかなり広汎な地域に伝わっていたということもわかる。

しかし、この時代までの箸の出土は、都の周辺や朝廷に関係した建物からの出土がほとんどであることから、箸の使用は主に都を中心として、都市住民や上層階級に限っておこなわれていたのではないかと思われる。

では、箸の使用が、一般庶民を含む広い階層のなかに普及、定着するにいたったのはいつなのだろうか。

まず古文獻をみることにする。

9～10世紀に紀長谷雄が記した『白箸の翁の序』に、

「卓観の末に一老翁あり。何れの人なるかを知らず、亦その姓名をも知らず。常に市中をめぐりて、白箸を売るを業とせり。時の人号して白箸の翁といへり。」

「卓観之末。有一老父。不知何人。亦不得姓名。常遊市中。以売白箸為業。人号曰白箸翁¹⁴⁾。」

（傍線は筆者による）

という記述が見られる。これにより京都の町では箸を売って商売になるほど箸の需要があったことがわかる。

しかし、この時代の一般庶民の集落跡からは箸の出土は見られず、この時代に一般庶民の間に箸が普及、定着したとはっきりといいきるまでには至らない。

こうした考古資料が出土するのは12～13世紀になってからのことである。例えば12～13世紀の熊本一般庶民の集落跡と見られる高橋南貝塚から、18片の箸が、また、鎌倉時代から室町時代にかけてのものと思われる広島草戸千軒町遺跡からは数万点の箸が出土している。つまり、一般庶民の間における箸の普及、定着はこの時代になってようやく疑いのないものとなるのである。

原本の年代	作 品	出 典
12世紀後半	病草子	小松茂美編『日本絵巻大成7』（中央公論社，1977）P 92～95， P 104 ～105
12世紀後半	餓鬼草子	小松茂美編『日本絵巻大成7』（中央公論社，1977）P 16～17
12世紀後半	彦火々出見尊絵巻	小松茂美編『日本絵巻大成22』（中央公論社，1979）P 18～19
13世紀後半	華嚴宗祖師絵伝	小松茂美編『日本絵巻大成17』（中央公論社，1978）P 22， 52～53
14世紀初頭	絵師草子	小松茂美編『日本絵巻大成11』（中央公論社，1977）P 50～51
14世紀初め	春日権現験記絵	田中一松監修『新修日本絵巻物全集16』（角川書店，1968）原色版 P 6
14世紀半ば	慕婦絵	田中一松監修『新修日本絵巻物全集20』（角川書店，1968）オフセットカラー 7
14世紀	後三年合戦絵詞	小松茂美編『日本絵巻大成15』（中央公論社，1977）P 20～21
14世紀	一遍上人絵伝	小松茂美編『日本絵巻大成別』（中央公論社，1978）P 178 ～179
14世紀	弘法大師伝絵巻	田中一松監修『新修日本絵巻物全集1』（角川書店，1970）P 30～31

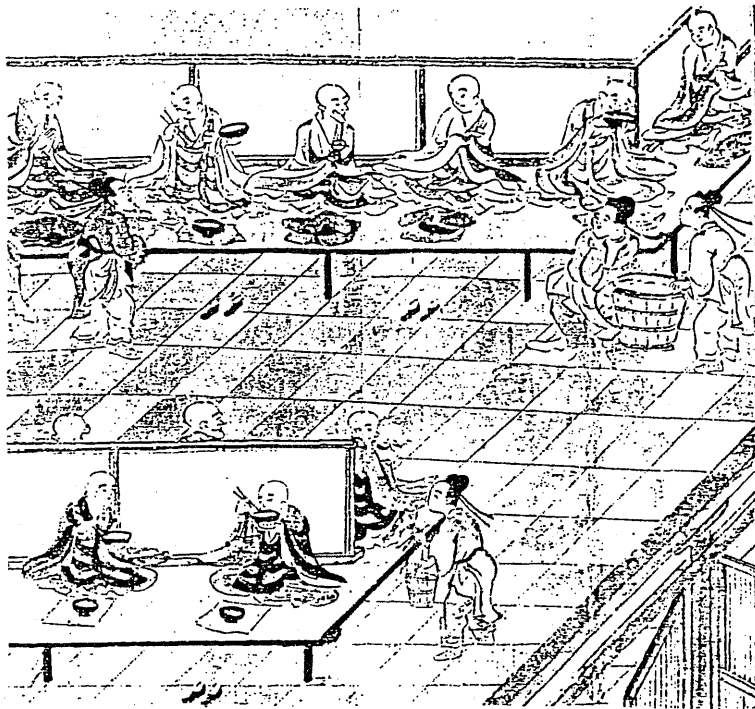
第7表 絵巻物に見られる箸

さらにこの時代以降は、絵巻物のなかにも箸がしばしば登場するようになり、庶民を含めた様々な階層で箸を使用する様子を詳細にうかがうことができる。（第7表，第16，17図）

以上の資料を通して、日本における箸使用の起源は7世紀まで確実に溯らせることができると、そして、9～10世紀には都を中心として庶民の間にも箸が浸透し始め、確実に庶民の間にも箸の使用が普及、定着したといえるのは12～13世紀以降であるといえることができるのである。



第16図 料理を食べる男（彦火々出見尊絵巻）



第17図 齋会における飯食供養（弘法大師伝絵巻）

〔注〕

- 1) 萩原浅男, 鴻巣集雄校注, 訳『日本古典文学全集1 古事記 上代歌謡』(小学館, 1976(3版)) P 86~87, P 236~237
- 2) 井上光貞監訳『日本書紀(上)』(中央公論社, 1988(4版)) P 221, P 557
- 3) 青木生子, 井手至, 伊藤博, 清水克彦, 橋本四郎校注『万葉集 二』(新潮社, 1978) P 429
- 4) 与謝野寛編『日本古典全集延喜式第一, 六斎院』(日本古典全集刊行会, 1926) P 216
- 5) 京大文学部国語学研究室『諸本集成 倭名類從抄 本文編』(臨川書店, 1968) P 300
- 6) 宇都保物語研究会『宇都保物語5 蔵開上』(古典文庫, 1958) P 987
- 7) 片桐洋一編『拾遺和歌集の研究』(大学堂, 1881) P 588
- 8) 萩谷朴校注『新潮日本古典集成 枕草子(下)』(新潮社, 1980(4版)) P 95
- 9) 馬淵和夫, 国東文磨, 今野達『日本古典文学全集23 今昔物語集三』(小学館, 1974) P 196
- 10) 前掲書1) P 86~87
- 11) 前掲書1) P 236~237
- 12) 前掲書2) P 221, P 557
- 13) 前掲書3) P 429
- 14) 柿村重松註『本朝文粹註釈(下)』(富山房, 1968(新修版)) P 192

(4)その他の地域

中国, 朝鮮, 日本以外の地域については, 考古資料, 文献資料共に無いに等しいということもあり, 箸の使用が普及した明確な時代を推定することは困難である。しかし, 数少ない文献と現行行われている「箸の使い分け」をもとに推測を行っていくことにする。

<ベトナム>

14世紀に元の馬端臨によって書かれた『文献通考』には

「今五嶺以南, 民庶皆手を以て団食す¹⁾」

という記述があることから, 14世紀の元代には五嶺以南にあたる地域すなわちベトナムにおいてはまだ箸の使用が行われていなかったということがわかる。つまり, ベトナムに箸が普及したのは, 早くとも15世紀以後のことであったということになる。

<台湾>

大正時代初期における台湾の原住民についての調査報告書『台湾蕃族慣習研究(1)』『蕃族調査報告書(1)(2)(3)』『蕃族慣習調査報告書(1)(3)』によれば, 当時, 日常の食事で箸を使っていたのは「サイセット族」だけで, その外の部族(「タイヤル族」「セーダッカ族」「ソウ族」「ブヌン族」「アミ族」「ピュマ族」)の間では手食が一般的であったという²⁾。これにより, 箸を使うという風習が台湾の原住民の間にもともと存在していたものではなかったということがわかる。

おそらく台湾に箸を伝えたのは漢民族であり, 箸の普及も漢民族の移住が本格化するようになってからのことであると思われる。それはおそらく鄭成功がオランダ人を駆逐し, 台湾を対清

反抗のための拠点とした17世紀以後のことであるまいか。

<西南中国および東南アジア山岳地帯の少数民族>

この地域の箸について記述した古文献は確認することができなかったので、「箸の使い分け」の型から、推測を試みることにする。手食を行っていた民族、地域が箸食あるいはナイフ・フォーク食といった器具を使った食べ方に移行したということはあっても、箸食あるいはナイフ・フォーク食から手食へ移行したという民族、地域は存在しない。したがって、この地域で行われている「手+箸」型という使い分けも「箸」型や「箸+匙」型から移行したのではなく、手食から移行したものであり、それがそのまま変化する事なく現在まで続いてきたものであると考えられる。

「手+箸」型の使い分けが行われているのは現在でこそ西南中国、東南アジア山岳地帯の少数民族に限られているが、かつては中国（漢民族）でも行われていた。このことは第一章の第二節でも触れた。

中国でこの「手+箸」型の使い分けが行われていたのがB.C. 5世紀～A.D. 1世紀と非常に古い時代のことであるということを考えれば、西南中国および東南アジア山岳地帯の少数民族で行われている「手+箸」型の使い分けもかなり古い時代から続いてきたものであると推測することができる。あるいは中国同様、この地域の箸使用の起源もB.C. 5世紀～A.D. 1世紀まで溯らせることができるのではあるまいか。

<モンゴル>

モンゴル系民族の中でも漢民族の文化と接触する機会の多かった上流階級の間では比較的早くから箸の使用が行われていたものと思われる。これは遼代（10～12世紀）の契丹人（モンゴル系民族）の墓所から箸が出土しているということにより、裏づけられよう³⁾。しかし、一般庶民の間ではどうだったのか。

14世紀のイギリスのマンデヴィルの『東方旅行記』には「シナに住むダッタン人（モンゴル人）の衣食住」についてこう記されている。

食事が終わると彼らは不潔にも衣服で手を拭う。ナプキンとか手拭いとかは、貴人の家しか用いないのである。それからまた、食後彼らは自分の皿や椀を洗わないで、食べ残した生肉といっしょに鍋類のなかにしまい、後でふたたびこれを食う。⁴⁾

太田昌子氏は、「食後に衣服で手を拭うことが不潔なものにうつるのは、やはり生肉を直接掴んで食べるために、手がかなり汚れていたからに違いない。」と考証なさっている⁵⁾が、おそらくそのとおりであろう。また元朝の宮廷の状況を述べた中にも、

食事の作法もわが国のほうがずっとまともである。なぜなら、大汗の宮廷にいる平民達はみんな、食事の際白布も何も用いずに、自分の膝の上に食べ物を置くし、おまけに、たいていは、パンなしにあらゆる種類の獣の生肉を食うからである。そして、食べ終わると彼らは衣服の裾で片手をふきとる。⁶⁾（傍線は筆者による）

とあることから、14世紀ごろ中国に住んでいた一般的なモンゴル人は手掴みで食事をしていても

のと思われる。

つまり、モンゴルの一般庶民の間で箸が使用されるようになるのは、早くとも14世紀以後のことであるということができよう。

〔注〕

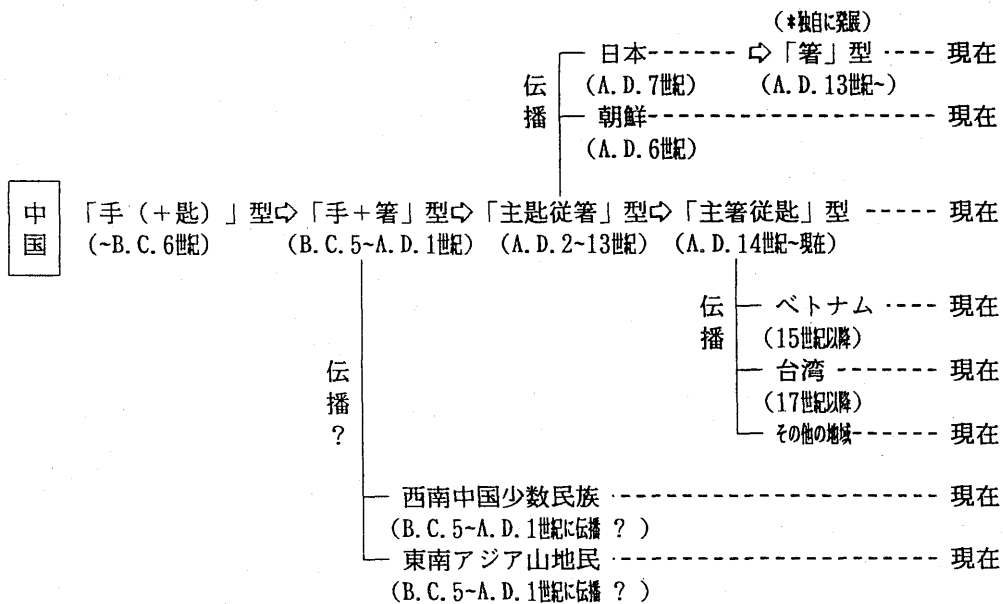
- 1) 『週刊朝日百科 世界の食べもの136』(朝日新聞社, 1983) P14~148
- 2) ①台湾蕃族調査会『南方資料館珍本, 民族類1巻 台湾蕃族慣習研究(1)』(南天書局, 1976(復刻版)) P 454~455 (台湾原住民全般について)
- ②臨時台湾旧慣調査会『南方資料館珍本, 民族類15巻 蕃族調査報告(1)』(南天書局, 1976(復刻版)) P 45 (アミ族について)
- ③臨時台湾旧慣調査会『南方資料館珍本, 民族類16巻 蕃族調査報告(2)』(南天書局, 1977(復刻版)) P 50 (アミ族について)
- ④台湾総督府蕃族調査会『南方資料館珍本, 民族類17巻 蕃族調査報告(3)』(南天書局, 1977(復刻版)) P 65 (ソウ族について)
- ⑤臨時台湾旧慣調査会『南方資料館珍本, 民族類23巻 蕃族慣習調査報告書(1)』(南天書局, 1977(復刻版)) P 119 (タイヤル族について)
- ⑥臨時台湾旧慣調査会『南方資料館珍本, 民族類25巻 蕃族慣習調査報告書(3)』(南天書局, 1977(復刻版)) P 60 (サイセット族について)
- 3) 第二章 第一節の第3表を参照のこと
- 4) J. マンデヴィル, 大場正史訳『東方旅行記』(平凡社, 1964) P 212~P 213
- 5) 太田昌子「中国古代における箸の定着に関する一考察 一定着に至る諸条件について」(『風俗』第13巻第4号, 1975) P 13
- 6) 前掲書3) P 183

(5) 小 括

資料の古さ, 豊富さから見て, 箸の起源地が現在の中国にあたる地域であることは疑いない。したがって, 中国以外の各地域における「箸使用の起源」とは「中国から箸が伝播した時期」ということになる。すなわち朝鮮が6世紀, 日本は7世紀である。

各地の普及, 定着時期については, 文献上の制約により不確実なものだが, 中国はB.C. 3~2世紀(戦国時代), 朝鮮は15世紀以前, 日本は12~13世紀, ベトナムは15世紀以後, モンゴルは15世紀以後, 台湾は17世紀以後であると思われる。

1の(2)で触れた, 中国や日本における箸の使い分けの変遷に即してこれを図示すると以下のようになろう。



第18図 箸の伝播

3 箸の伝播、普及、定着の背景に関する若干の考察と箸の起源地の推定

(1) 東アジア各地における箸の伝播、普及、定着の背景について

古来から、中国の周辺地域の特に上流階級の人達には、中国の先進文化に対する強い憧れがあった。それゆえ、これら中国周辺の諸地域では箸は単なる「道具」としてではなく、中国の先進文化の一つとして捉えられたものと考えられる。

これは箸の使用が多くの場合一般庶民の間からではなく、上流階級の間から始まっていること、また、地域によっては上流階級の間だけで使用されているということなどからもうかがうことができる。

典型的な例としてはモンゴルを挙げることができよう。モンゴルでは、それほど使わないにもかかわらず、銀製（あるいは箸先を銀で塗装したもの）や象牙製のきらびやかな箸を蒙古刀の鞘と一緒にしまって（ただし、外からも見えるようにして）持ち歩くという風習があった。これは、モンゴルでは、箸が実用の器具としてというよりは、装飾品の一つとして扱われていたという事を示すものであろう。もちろん装飾品として成立した背景には中国の先進文化、先進文明に対する憧れがあり、きらびやかな箸を持ち歩くことによって自らの先進性、裕福さを誇示していたものと思われる。同様のものは李朝時代の朝鮮にも見られる。ここでは婦人用の懐刀（粧刀）に銀製の箸を備えつけたというものである。また、日本では正倉院の御物の中に「金銀箸」というも

のが伝わっているが、これもかつて「装飾品」として価値があったからこそ大切に保管、保存されてきたのではないかと思われる。

以上のことから、中国周辺諸国には確かに「中国先進文化への憧れ」があったこと、そして、そのことが周辺の諸地域に箸が伝わる大きなきっかけとなったということが考えられるのである。

ただ、これは、あくまでも「受入れ＝伝播」のきっかけであって、伝播、普及、定着を決定づけた要因ではない。というのも、箸は基本的には「道具（食具）」であり、装飾品というのはあくまでも副次的な要素に過ぎないのである。この「箸＝道具」が広く伝播、普及、定着するためには、受入れる側にとって、箸が「便利」あるいは「有用」でなければならない。さらに、そのように判断されるためには、受入れる側に、その道具が効果を発揮する状況、対象が存在しなければならないのである。

ここでいう受け入れる側とは東アジアの諸地域であり、箸が「便利な道具」「有用な道具」として効果を発揮する状況、対象とは、食卓であり、食物であるということになる。

つまり、東アジアに箸が広く伝播、普及、定着したもっとも大きな要因として、箸が「便利な道具」「有用な道具」として効果を発揮する食物が東アジアに共通して存在したということが考えられるのである。

では、東アジアに広く存在し、かつ箸が「便利な道具」「有用な道具」として効果を発揮する食物とは具体的にはどのようなものを指すのか。

ここでは、一般的に指摘されている以下の3つの食物を取り上げて、若干の考察、検討を行っていくことにしたい。

- A 汁の中の具（特に繊維質の野菜）
- B 粘り気のある食べ物（特に御飯）
- C めん類

あくまでも推測の域を出るものではないが、第一章で概観した箸使用の現状や、第二章で用いた古文書、考古資料を用いて、できるかぎりの裏付けを行っていく。

< A 汁の中の具（特に繊維質の野菜） >

煮立った鍋の中の具を手で取ることは熱くて不可能であるし、匙（散り蓮華）を使うにしても何の苦労もなしにすくい取れるというわけではない。特にネギ、ゴボウと言った細長い繊維質の野菜を取るには相当の苦労を覚悟せねばならないだろう。箸はこうした不便を解消するために発明された器具であったといえる。

『礼記』曲礼上篇の記述にも

「汁物に野菜が入っている場合は箸を用いる。野菜が入っていない場合は箸を用いない」

「羹之有菜用挾，其無菜物不用挾。¹⁾」

とあり、古代中国においても汁の中の具（野菜）をすくい取ることは、箸の基本的かつ重要な役

割だったことがうかがえるのである。

< B 粘り気のある食べ物（特に御飯） >

碗の中に盛られた炊いた米すなわち御飯を、手、あるいは匙を使って食べることは決して不可能ことではないし、実際古い時代にはそうして食べられていた²⁾。しかし、どちらで食べるにしてもべとついてしまい、あまり効率の良いもの、気持ちの良いものとはいえないだろう。その点箸は、慣れると手や匙をべとつかせることなくスムーズに御飯を口まで運ぶことができる便利な器具であったといえる。

『礼記』曲礼上篇には

「黍飯を食べるのに箸を使ってはならない」

「飯黍無以箸³⁾」

という記述が見られるが、これに対して清代の孫希旦が『礼記集解』のなかでこのような注釈をつけている。

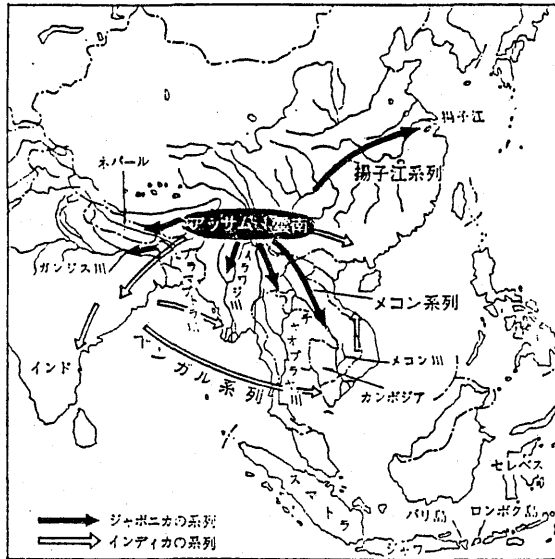
「黍は粘気があるけれども、これを飯に炊いた場合、やはり手で取るべきで、箸を使うべきではない。」

「黍雖黏飯之猶用手而已不用箸也⁴⁾」（傍線は筆者による）

清代の中国人にとって、粘り気のある黍飯を食べるのに箸を使わないことは、あえて注釈を必要とするほど不自然なことだったのである。つまり、清代の中国では箸は粘り気のある食物を食べるための食具として明確に認識されているということがうかがえるのである。

最も典型的な粘り気のある食べ物といえば、米（御飯）が挙げられるだろう⁵⁾。ただし箸を使うに好都合な程度の粘り気をもった米となるとかなり限られてくる。ウルチ米のインディカ種はパサパサ、サラサラして箸でつまむに適さない。実際、インドや東南アジアの平野部の人々などは手か匙を使って食べるのが普通である（ただし中国の華南、ベトナムの人は箸を使う）。逆にモチ米やモチはネバナバ、ベトベトすぎてこれも箸を使うのに適さない。実際、蒸したモチ米＝強飯（おこわ）を主食にしている東南アジアの山地民族は食べる際には手でちぎって適当な大きさに丸めながら食べるのが普通である⁶⁾。

また、ジャポニカ種であってもその炊き方によって粘り具合はだいぶ変わってくる。中尾佐助氏によれば、東アジアにおける米の炊き方は炊き干し法と湯取り法の2つに大きく分けられるという。前者は主に日本、華中、華南、台湾で日常行われているやりかた、後者は主に中国華北、朝鮮半島で行われている方法で米の煮汁を絞り流して炊くというやり方である⁷⁾。当然、米の持つデンプン質の入った煮汁を捨ててしまう後者のほうがかなりパサパサ、サラサラになるが、中国華北ではこの食味が伝統的に好まれてきた⁸⁾。本来はこの湯取り法で炊かれたジャポニカ種の御飯も箸で食べるに適したものではなかったのである。実際、華北では明代になるまで御飯は箸ではなく匙で食べられていたのである⁹⁾。青木正児氏は「用匙喫飯考」のなかで、明代以降箸が使われるようになったのは長江流域の粘り気のある米が北方でも主流になったためであろうと推測しているが¹⁰⁾、おそらくその通りであろう。結局、箸を使うに好都合な程度の粘り気をもつ



第19図 アジア大陸における稲の道
 渡部忠世『稲の道』(NHK ブックス, 1989) P 214

た御飯を食べていたのは、日本と、中国の長江流域の人々だけであったということになる。

<C めん類>

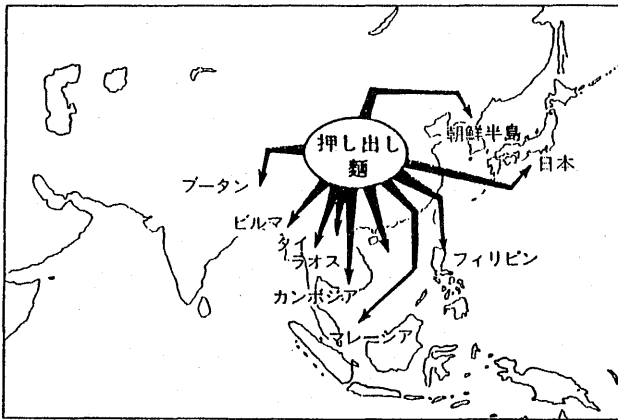
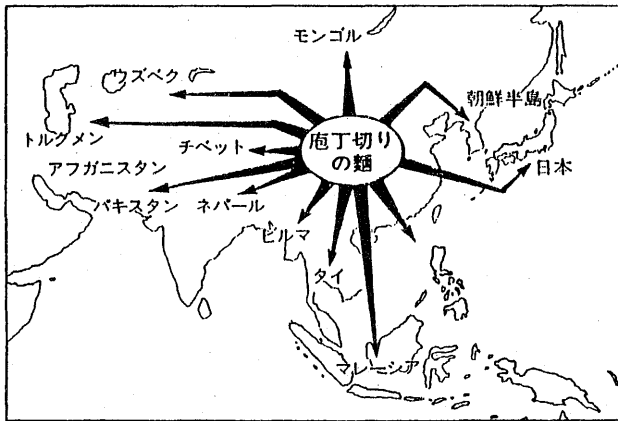
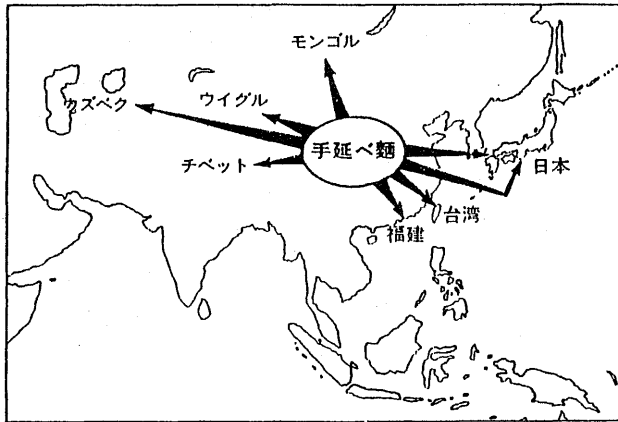
ここでいう「めん類」とは、そば、うどん、ラーメン、ビーフンなどの「穀類の粉を使ってひも状にした食品」を指すものであり、「小麦粉、あるいは小麦粉を原料にして作られる食品(餃子、饅頭、ワンタンなども含む)」を指す中国語の「麵(mian)」とは区別して使うことにする。

「めん類」の原型は既に6世紀初めの『齊民要術』に登場する¹¹⁾。しかし、これらが普及、定着するようになるのは、胡食(小麦の粉食)が爆発的に流行し、一般化する唐代以降¹²⁾であると思われる。日本へ伝わったのは鎌倉から室町にかけてのこと¹³⁾、朝鮮に伝わったのは17世紀のことと言われる¹⁴⁾。

以上のことを考えると、めん類と箸の結びつきは、先に挙げた2つの食物に比べ、かなり新しいものであったといえよう。しかし、箸との結びつきの強さはA,Bよりもはるかに強固なものである。これは東アジアで箸を使わずにめん類を食べる地域がほんの少数の例外¹⁵⁾を除いて存在しないという事実が何よりの証拠となろう。むしろ、普段は箸を使わないが、めん類を食べるときだけは箸を使うという地域すら存在するほどなのである¹⁶⁾。

おそらく、ここで取り上げた3つの食物のなかでは、このめん類の普及、定着が箸の伝播、普及、定着を最も決定づけた要因であったであろうと思われる。

粘り気のある米を食べず、必ずしも箸の使用が盛んであるとはいえなかった¹⁷⁾北方で、唐代



第20図 各種めん類の伝播

『人間は何を食べてきたか [アジア・太平洋編] 上 麺・イモ・茶』（日本放送出版協会，1990）

P74より転載

以後箸の使用が盛んになるのも¹⁸⁾、この「C めん類」の発達、普及によるものと推測されるのである。

以上、3つの食物について若干の考察と検討をおこなった。「C めん類」の普及が唐代以降のことであると考えられることから、箸の発明の契機となったのは、非常に古い時代から存在していたAとBであったであろう。しかし、3つの食物のうち、最も箸との結びつきが強固なのは「C めん類」であり、おそらくこれが、箸の普及、定着を最も決定づけた要因であったであろうと思われる。

最後に、しばしば指摘される「椀」と「箸」の結びつきについて少し触れたい。指摘の通り、箸の使用が見られるのは、椀状の食器（ここでは、皿に比べ深みのある食器、小鉢や丼なども全て椀として扱うものとする）が発達している東アジアにほとんど限られており、御飯やおかずをすべて皿状の食器や植物の葉などに盛って食べる地域（インド、東南アジア平野部など）には、箸の使用はほとんど見られない。

しかし、これは「椀の使用」が「箸の使用」を直接的に促した（あるいはその逆）ということを示すものではない。つまり、「椀があったから箸が使われるようになった」あるいは「箸があったから椀が使われるようになった」わけではない。

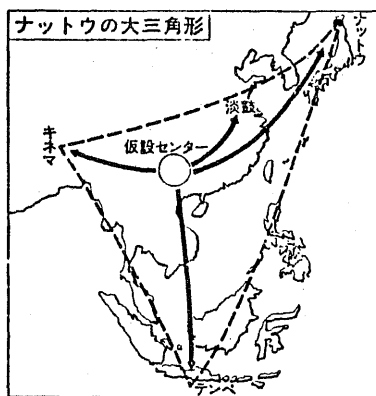
「椀」が東アジアで発達したのは、箸と同様、それをを用いるに適した食べ物が東アジアに共通して存在したためであると考えられよう。椀状の食器を使うに適した食物とは、まさに先に挙げた「A 具の入った汁物」であり、「B 粘り気のある食物」であり、「C めん類」である。椀もこれらの食物を食べるための食器として発達したと考えられるのである。

つまり、「椀」を用いるのに適した食べ物と「箸」を用いるのに適した食べ物がそれぞれ共通していること、これが両者の分布を重ね合わせている最大の原因なのである。

「椀（箸）のあるところに箸（椀）あり」という事実は決して単なる偶然によるものではないということである。

〔注〕

- 1) 市原亨吉『全釈漢文体系12 礼記（上）』（集英社、1982（第3版））P 65
- 2) 青木正児氏「用匙喫飯考」（『華国風味』岩波文庫、1986（第3版））P 102
- 3) 前掲書1）P 59～60
- 4) 孫希旦『礼記集解』（文哲出版社、中華民国61年（再版））P 53
- 5) そのほかに粘り気のある食物としては「納豆」が挙げられるが、日本、中国、朝鮮以外の地域で、納豆がどうやって食べられているか（手が匙か箸か）については不明であり、この是非については論ずることができない。ただ、納豆も東アジアのかなり広い地域に共通して見られる食物であるということは注目すべきであろう。



上山春平, 佐々木高明, 中尾佐助
『統照葉樹林文化』中公新書
1985 (11版), P 129より転載

- 6) 石毛直道編著『東アジアの食の文化 (食の文化シンポジウム'81)』(平凡社, 1981) P 237
- 7) 中尾佐助『料理の起源』(NHK ブックス, 1987 (29版)) P 9~24
- 8) 前掲書 1) P 109~112
- 9) 前掲書 1) P 112
- 10) 前掲書 1) P 112
- 11) 『斉民要術』餅法第82には「手延べめん」の原形である「水引餅」, 「押し出し式のめん」の原形である「粉餅」, 「糰」が見られる。(繆啓倫校釈, 繆桂龍参校『斉民要術校釈』農業出版社, 1982, P 509~511)
- 12) 古賀登「唐代における胡食の流行について」(東洋学術研究 8-4, 1970) P 85
青木正児『饅頭の歴史』(『華国風味』岩波文庫, 1986 (3版), P 74)
- 13) NHK 取材班, 奥村彪生, 西山喜一, 松下智『人間は何を食べてきたか [アジア太平洋編] 上 麵・イモ・茶』(日本放送出版協会, 1990) P 71
- 14) 前掲書 13) P 73
16世紀末~17世紀の人, 許の『屠門大嚼』に「糸麵」なる料理についての記述が見られる。(鄭大聲『朝鮮の料理書』平凡社, 1982, P 255)
- 15) 福建省福州の「手抓麵」や, ウィグル族の「サンズ」などは手で食べる「めん料理」である。ただしこれらは主食としてというよりはスナックとして食べられる。また, 東南アジアの一部では匙(散り蓮華)だけでめん類を食べる場合がある。
- 16) 新疆ウィグル自治区, タイ, インドネシアなど
- 17) 隋唐以前には華北からの箸の出土はほとんど見られない。(第二章 第一節の図を参照のこと)
- 18) 隋唐以後になって, 北方からの出土が急激に増加する。(第二章 第一節の図を参照のこと)

(2) 箸の起源地の推定と箸を発明した民族について

資料の古さ, 豊富さから考えて, 箸の起源地が現在の中国にあることは疑いない。では中国のどのあたりに箸の起源地を求めることができるのだろうか。

まず、中国大陸の北方（黄河流域）か南方（長江流域）か。第二章の一節でも触れたが、隋唐以前の箸の出土は、南方の長江流域に集中して見られる。北方の黄河流域から多く出土するようになるのは、隋唐以後になってからである。また、全時代を通して見ても長江流域からの出土が目立って多い。乾燥地域で、遺物の保存に適しているはずの北方よりも、湿気が多く保存に不適な南方からの出土が多いということは、隋唐以前には北方よりも南方の方が箸の使用が盛んであったということを示す証拠となるものであろう。

また、古来から「はし」を表す語は全て「たけかんむり」か「きへん」であった¹⁾。なかでも最も古い語である「箸」が「たけかんむり」であることは注目すべきであろう。つまり、これにより、箸はその初期の段階から竹製のものが用いられていたということがうかがえるのである²⁾。材料として竹が利用されるためには、当然、竹が身近に相当豊富に存在していなければならない。とすると北方より南方、特に温暖で水資源が豊富な長江流域の方が竹が豊富に存在しているわけで、こうしたことから考えても箸の起源地は南方の長江流域であると考えることができる。

では、長江流域の東部（下流）か西部（上流）か。まず、世界最古の箸が出土した雲南（長江上流）が「粘り気のある米＝ウルチ稻のジャポニカ種」の起源地の一つであると考えられているということは注目に値する³⁾。前節でも触れたとおり、この「粘り気のある米＝ウルチ稻のジャポニカ種」は、箸の発明、及び普及の初期の段階では非常に大きな契機となったものである。これが最も古くから栽培されていたということは、長江上流では、箸の発明される契機が最も古くから存在していたということになるのである。

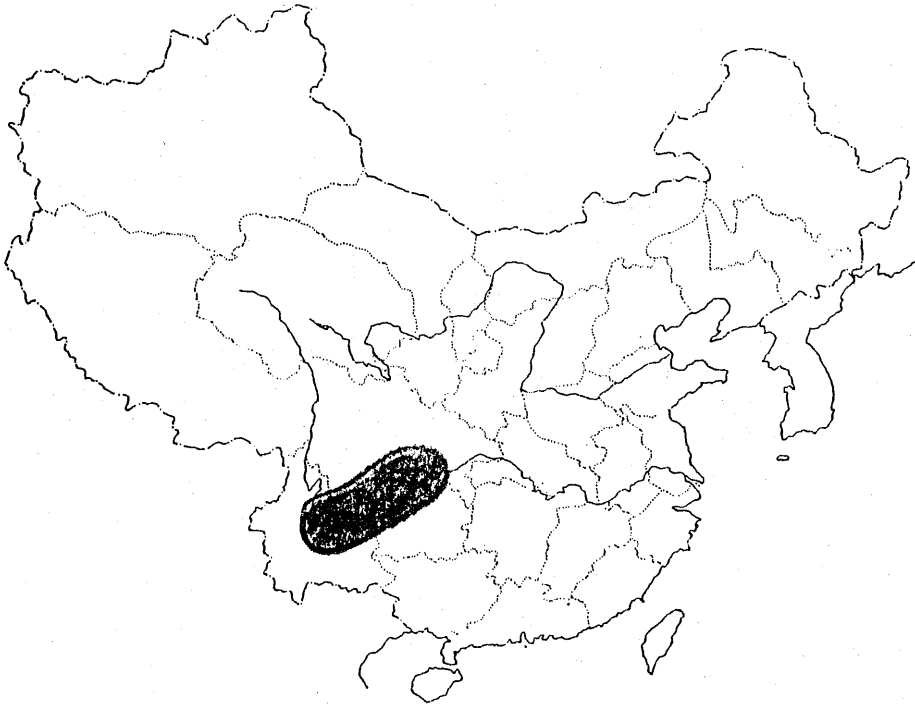
また、仮に東側（長江下流）が起源地で、春秋中晩期から既に箸の使用が行われていたとすれば、近隣の朝鮮や日本にはもっと早い時期に、また、もっと古い「使い分け」の型（「手+箸」型）が伝わったはずである。しかし、実際はその逆であり、朝鮮、日本には比較的新しい「使い分け」の型（「匙+箸」型）が、また、中国西南部およびそこに隣接する少数民族の間には、より古い「使い分け」の型（「手+箸」型）が伝わっているのである。つまり、箸の起源地は長江の東側（下流）とは考えにくいということである。

しかし、何といても、世界最古の箸が長江の源流である金沙江の近くの雲南省祥雲大波那から出土しているということは重要である。中下流の安徽省貴池に箸が出現するのはこれより少し時代が下った春秋晩期～戦国初期のことであり、下流の海に面した地域（江蘇、浙江など）に箸が出現するのは、さらに時代が下って唐代になってからのことなのである。このような出土の状況は、箸の起源地が長江の上流であるという何よりの証拠となるものであろう。

以上、箸の起源地は長江流域の西部（上流）、すなわち中国西南部であるという結論が導き出されるのである。

ただし、ここで注意しなければならないのは中国西南部＝漢民族居住地域ではないということである。

当時の勢力分布図と照らし合わせてみるとわかるが、この地域の大部分は箸の使用が始まった



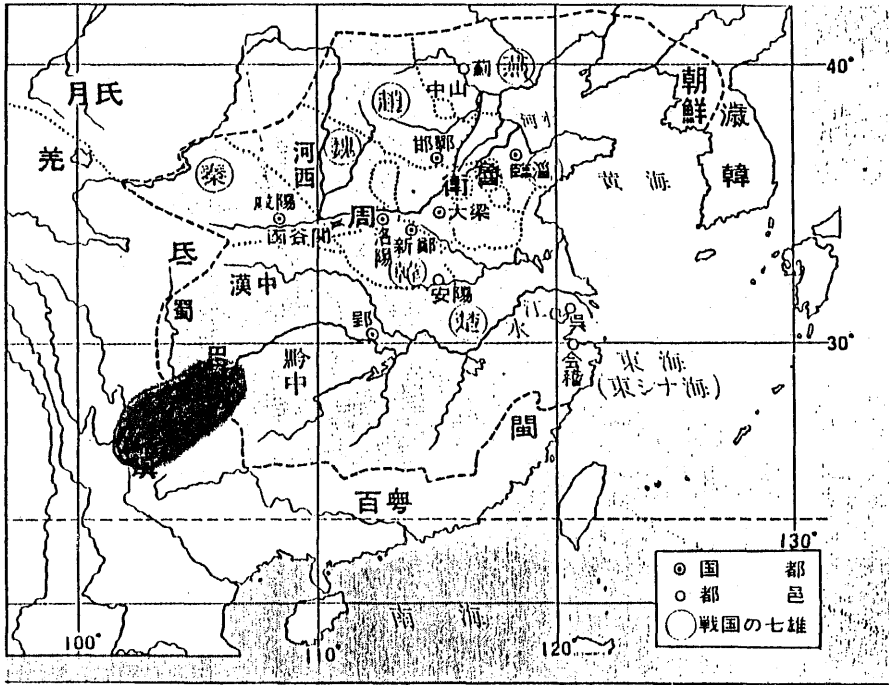
第21図 箸の推定起源地

当時、中国（漢）文化圏どころか楚の文化圏にも含まれない漢民族にとっては「夷狄の地」であった。ここに居住していたのは「夜郎」、「昆明」、「夜郎」、「哀申」、「冉」、「功」、「笮」、「徒」、「白馬氏」、「滇」などの少数民族であった⁴⁾。前漢の武帝の時代に漢民族と接触、そして彼らの支配下に置かれるまでは、彼らは独自の文化を発達させていたのである⁵⁾。

このように「箸の推定起源地＝中国西南部」の大部分が「異民族居住地域＝異文化圏」であったということは、雲南祥雲大波那の世界最古の箸が、漢民族ではなく、昆明族の銅棺墓から出土しているという驚くべき事実⁶⁾とあわせて、従来の常識「箸は中国人（漢民族）によって発明された」に重大な疑問を投げかけるものとなろう。つまり、箸の発明が漢民族によるものではなく、かつて西南中国に住んでいた少数民族によるものであるという可能性を示唆しているのである。

もちろん、この2つの根拠だけをもって箸の発明が中国西南部の少数民族によるものであると結論づけることはできない。推定起源地＝中国西南部には漢民族の居住地域（巴、蜀）も含まれていることから、箸の発明が彼らの手によるものであると言う可能性もまだ決して捨て切れるものではないのである。

ただ、残念ながら、箸の発明が漢民族、西南中国の少数民族、どちらの手によるものを明らかにするには、資料があまりに少なすぎる（春秋時代の箸に関する資料は雲南と安徽から出土し



第22図 戦国時代 (B.C. 4 世紀) の中国

た 2 例の考古資料があるに過ぎない)。したがって、ここでは、箸の説明が、必ずしも漢民族の手によるものではなく、中国西南部の少数民族の手によって発明された可能性も十分にあるということを描きしておくにとどめたい。

〔注〕

- 1) 「はし」を表す語としては「箸」「桼」「桼提」「櫓」「筋」「筴」「快」「筴」が見られる。太田昌子「中国古代における箸使用の定着について—古代文献より見た定着年代の考察—」(『風俗』第11巻第2号, 1973) P38より(ただし「欄」は著者が加えたもの)
- 2) 後漢の『説文解字』には「箸 従竹者聲(箸という字は竹に関係しており、者の部分は音を表す)とある。
(『説文解字真本』中華書局, 中華民国55年, 五卷上四)
- 3) 渡部忠世『稲の道』(NHK ブックス, 1989 (11版)) P194~195
- 4) 久村因「史記西南夷列伝集解稿(一)」(『名古屋大学紀要』14, 1970)
久村因「 ♪ (二)」(『 』15, 1971)
久村因「 ♪ (三)」(『 』16, 1972)

久村因「ク (四)」「ク」18, 1974)

5) 阿部紘「古雲南考—インドル—と少数民族との拮抗—」(『中央商科短大紀要 6, 1983)

6) 李鴻啓編『雲南人物古跡』(雲南人物出版社, 1984) P 32~33

<結語>

これまでの考察を通して、東アジアの箸文化の歴史的展開およびその背景というものをいかにかなりとも明らかにできたのではないかと考える。

最後に、箸文化の将来についても触れながら、本稿を締めくくりにしたい。

手や匙だけでは食べるのに不便な「汁のなかの具(特に繊維質の野菜)」、「粘り気のある食物(特に粘り気のある御飯)」をいかにして食べるかを考えた末、箸は中国の西南部で生み出された。それは春秋中晩期(B.C. 5世紀)かそれを少し溯った時期のことである。発明したのは、あるいは漢民族ではなく、中国西南部の少数民族であるという可能性もある。

初期の段階において、箸は「粘り気のある御飯」が食べられていた長江流域を中心に西から東へ普及していった。これは前漢までの箸の出土が長江流域から集中的に出土しているということからも裏づけられよう。

その後、唐代になって、華北で「めん類」が発達、普及するようになる。現在のめん類と箸との結びつきの強さから考えて、おそらくこれが箸の普及、定着を決定づけた最大の要因であろうと思われる。これにより、箸の使用が必ずしも盛んであるとは言えなかった中国北方地域でも、唐代以後、箸の使用が盛んになるのである。そして、めん類が南方を含めた中国各地に伝わると、それに伴って、中国における箸の普及、定着もますます決定的なものになっていった。

中国周辺の諸地域には「中国の先進文化への憧れ」が大きなきっかけ、動機となって、まず上流階級の食卓に、いわば「中国先進文化の象徴的存在」として受け入れられた。それは朝鮮では6世紀、日本では7世紀のことである。しかし、その後、箸は上流階級のみならず一般庶民にまで広く普及、定着することになる。これは日本では12~13世紀、朝鮮では15世紀以前、ベトナムでは15世紀以後、台湾では17世紀以後、モンゴルでは15世紀以後のことである。

このように、箸が東アジアの諸地域に、しかも一般庶民の間にまで普及、定着したのは、東アジアの諸地域の人々にとって箸が「便利な道具」「有用な道具」であったからにはほかならない。そして箸が「便利な道具」「有用な道具」として受け入れられた背景には「具の入った汁物」「粘り気のある食物(特に御飯)」「めん類」といった東アジア共通の食物の存在があった。

箸が「便利な道具」「有用な道具」として効果を発揮するこうした食物が東アジアの諸地域に共通して普及していたこと、これが、東アジアに箸が伝播、普及、定着した最大の要因だったのである。

そして現在、箸及び箸文化は東アジアのみならず、アジアの広汎な地域にひろがり、それぞれの地域の食体系ならびに文化体系の中に深く組みこまれながら、独自かつ多様な展開を遂げるにいたる。

おそらく、今後も箸の使用は、箸を組みこんだ東アジアの食体系そのもの、ひいては文化体系そのものを揺るがすような大きな変化（食事が全てチューブ食のようになってしまったり、廃仏毀釈や文化大革命のような、伝統文化を徹底的に破壊するような運動が行われるとか）が訪れないかぎり、長らく続いていくことであろう。

<主要参考文献一覧>

- 太田昌子「中国古代における箸使用の定着について—古代文献よりみた定着年代の考察—」
（『風俗』11巻2号, 1973）
- 太田昌子「中国古代における箸の定着に関する一考察 —定着に至る諸条件について—」
（『風俗』第13巻4号, 1975）
- 太田昌子「箸の使いやすさに関する実験的研究」『家政学研究Vol 22, No. 1, 1975』
- 太田昌子「箸のルーツの謎を秘める古代中国の食習」(『生活文化史5 食と食空間』雄山閣, 1984)
- 長谷川千鶴・向井由起子・橋本慶子「わが国における食事用の二本箸の起源と割り箸について」
（『調理科学』1977, 4）
- 王仁湘「中国古代進食具七箸叉研究」(『考古学報』1990, 3)
- 王仁湘「古代的筷子及其使用」(『中国烹飪』1985, 9)
- 沈儔「箸探」(『中国烹飪』1987, 5)
- 宋経文「箸的忌諱」(張頌松, 謝基賢ほか編著『飲食習俗』遼寧大学出版社, 1988)
- 本田總一郎『箸の本』(柴田書店, 1978)
- 本田總一郎『箸の本』(日本実業出版社, 1985)
- 一色八郎『箸の文化史』(御茶の水書房, 1990)
- 一色八郎『日本人はなぜ箸を使うか』(大月書店, 1987)
- 鳥越憲三郎『箸と俎』(毎日新聞社, 1980)
- 神埼宣武『日本人は何を食べてきたか』(大月書店, 1988 (3版))
- 青木正児『華国風味』(岩波文庫, 1986 (3版))
- 江頭マサエ『箸のおはなし』(J D C, 1987)
- 周達生『中国の食文化』(創元社, 1987)
- 周達生『食文化から見た東アジア (NHK 市民大学1988年10~12月期)』(日本放送出版協会, 1988)
- 石毛直道『食事の文明論』(中公新書, 1989 (9版))
- 石毛直道ほか編『論集 東アジアの食文化』(平凡社, 1985)
- 石毛直道, 黄慧性『韓国の食』(平凡社, 1988)
- 石毛直道編著『東アジアの食文化 (食文化シンポジウム'81)』(平凡社, 1981)
- 梅棹忠夫, 石毛直道, 中尾佐助『食事の文化』(朝日新聞社, 1980)
- 中尾佐助『料理の起源』(NHK ブックス, 1987 (29版))

- 上山春平『照葉樹林文化』（中公新書，1985（22版））
- 上山春平，佐々木高明，中尾佐助『続照葉樹林文化』（中公新書，1985（11版））
- 佐々木高明『照葉樹林文化の道』（NHK ブックス，1988（15版））
- 渡部忠世『稲の道』（NHK ブックス，1989（11版））
- 篠田統『米の文化史』（社会思想社，1979（増訂2版））
- 篠田統『中国食物史』（柴田書店，1976（2版））
- 篠田統『中国食物史の研究』（八坂書房，1978）
- 関根真隆『奈良朝食生活の研究』（吉川弘文館，1974（2版））
- 遠藤元男，谷口歌子『日本史小百科 飲食』（近藤出版社，1983）
- NHK 取材班，奥村彪生，西山喜一，松下智『人間は何を食べてきたか [アジア太平洋編] 上 麵・イモ・茶』（日本放送出版協会，1990）
- 安藤百福編『麵ロードを行く』（講談社，1989（2版））
- 金子量重編『日本とアジア＝生活と造形7 道具と器』（学生社，1983）
- 白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』（講談社，1978）
- 田畑久夫，金丸良子著『雲貴高原の少数民族 ミャオ族，トン族』（白帝社，1989）
- K.C.Chang 『Food In Chinese Culture』Yale University Press New York and London
- 『週刊朝日百科 世界の食べもの 1～140』（朝日新聞社，1981～1983）
- 『季刊 民族学 1～54』（1977～1990）
- 『文物』1950～1990
- 『考古』1960～1990

新刊紹介

白鳥芳郎教授古稀記念論叢 『アジア民族の歴史と文化』

記念論文集の出版が多いのは，学問の世代交替を意味するのだろうか。長年，東南アジア民族史をリードされてきた白鳥教授の論文集が出版された。20の論文からなり，内容の一端を紹介すると，伊藤清司「神判と巫師」，君島久子「龍神説話の二面性」，大林太良「華南少数民族の作物起源神話」，百田弥栄子「盤瓠をめぐる神話」，斎藤達次郎「ナシ族のトンバ教神話とモンゴル叙事詩」，比嘉政夫「門中形成の土着的基盤と外来的要素」，加治明「ベトナム西北地

方のタイ族の宗教信仰」，渡辺欣雄「香港水上居民の家族生活」，宮本勝「ルングス族の法文化」，菊地京子「イフガオ社会における階層性」，菊地靖「双系制社会における組織行動様式」，量博満「岩間葬について」，クライナー・ヨーゼフ「オーストラリアと沖縄」などである。巾広い論文構成から白鳥教授の学風がしのばれる。

（佐野賢治）

A 5 判 390頁 六興出版刊
1990年11月刊行